

茨城県行方郡麻生町

大 門 貝 塚

C地点発掘調査報告書

2002年6月

大門貝塚C地点発掘調査会
麻生町教育委員会

序

麻生町は霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と緑の豊かな自然に恵まれています。古代より人々が生活するうえで、恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところです。

麻生町粗毛の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと鹿行文化研究所・汀安衛氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することができました。ここに関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担してくださいました水貝建設有限会社 代表取締役 水貝一郎氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げごあいさつといたします。

平成14年6月

麻生町教育委員会教育長

橋 本 豊 榮

例 言

1. 本書は、茨城県行方郡麻生町租毛字貝殻 266 番地他に所在する大門貝塚 C 地点の調査報告書である。
2. 本貝塚の調査は、土砂採取工事に先行する事前調査である。調査対象地区は大門貝塚 C 地点と呼称される面積 20 ㎡である。調査は、平成 6 年 10 月 8 日から同 10 月 25 日までの 9 日間行なった。整理は予算の関係で遅れ鹿行文化研究所の全額負担で進め平成 14 年に報告書の刊行になった。
3. 本調査は、鹿行文化研究所の 汀 安衛 が担当した。
整理は、西田和子が遺物実測、拓本、汀 安衛 が原稿の執筆した。
4. 調査会組織

大門貝塚 C 地点発掘調査会組織一覧

役職	氏 名	備 考	役職	氏 名	備 考
会長	根 本 宗 一	麻生町教育委員会教育長	理事	水 貝 一 郎	水貝建設有限会社
副会長	藤 崎 謙 一	麻生町文化財保護審議会会長	〃	茂 木 敏	麻生町教育委員会事務局長
理事	茂 木 岩 夫	〃 副会長	監事	高 田 政 彦	水貝建設有限会社代理人
〃	平 輪 一 郎	〃 委員	〃	貝 塚 俊 洋	麻生町出納室長
〃	植 田 敏 雄	〃 専門調査員	幹事	搦 田 和 夫	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	汀 安 衛	大門貝塚 C 地点調査団調査主任	〃	箕 輪 克 弥	〃 主幹

※ 指導機関：茨城県教育庁文化課 茨城県鹿行教育事務所

5. 本調査にさいし次の方々にご協力を受けた。記して感謝の意をあらわしたい。
調査、報告書作成にあたり茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、歴史館 斉藤弘道氏、麻生町教育委員会、牛堀町水貝建材、作業協力者 青木一男・今泉清衛・藤崎利男・茂木次良の丞・上原和男・小川セイ・兼平すえ・横田泰隆の各氏にお世話になりました。

凡 例

1. 本書は、大門貝塚 C 地点の貝塚の土砂採取部分のみの調査である。
2. 遺物実測図、拓影図は原則 1/3 としスケールを図示した。
3. 本貝塚の調査は、平成 6 年であり報告書の刊行に 7 年の歳月を費やした。これは予算の見積もり、積算の甘さがあった。その後三者に於いて協議を重ねたが小額の増額しか認めて貰えなかった。
結果的に 7 年の間、本研究負担で少しづつ整理を続け刊行の運びになった。

目 次

序 文	
凡 例	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次	
第 I 節 貝塚の位置と環境	1
第 II 節 調査に至る経過	2
1. 調査日誌	2
第 III 節 貝塚の占地	2
はじめに	2
1. 貝 塚	3
2. 貝層と貝種	5
3. 土 器	5
1区2層	5
1区3層	7
1区4層	12
2区3層	12
2区4層	17
3区3層	19
4区2層	23
4区3層	25
4区4層	29
4. 土器片鏟	29
5. 石 器	31
6. 貝 製 品	35
a. 貝 刃	35
b. 貝 輪	35
c. その他の製品	35
d. タカラガイ	35
7. ま と め	37
第 IV 節 骨角牙製品	37
a. 刺突具	37
b. 骨 針	37
c. 釣り針	37
d. その他	37
第 V 節 脊椎動物遺体	37
① 魚 類	38
② 鳥 類	38
③ 哺乳類	38
④ 人 間	38
⑤ 両生類、爬虫類	38
第 VI 節 貝 類	41
小 結	42
第 VII 節 総 括	43

插图目次

第1图	大門貝塚位置图	1
第2图	貝塚地籍图	3
第3图	貝塚測量图	4
第4图	1区2層出土土器実測、拓影图	6
第5图	3区3層出土土器実測、拓影图	8
第6图	1区3層出土土器実測、拓影图	9
第7图	1区3層出土土器実測、拓影图	10
第8图	1区3層出土土器実測、拓影图	11
第9图	1区4層出土土器実測、拓影图	13
第10图	1区4層出土土器実測、拓影图	14
第11图	2区3層出土土器実測、拓影图	15
第12图	2区3・4層出土土器実測、拓影图	16
第13图	2区4層出土土器実測、拓影图	18
第14图	3区3層出土土器実測、拓影图	19
第15图	3区3層出土土器実測、拓影图	21
第16图	3区3層出土土器実測、拓影图	22
第17图	4区2層出土土器実測、拓影图	24
第18图	4区3層出土土器実測、拓影图	26
第19图	4区3層出土土器実測、拓影图	27
第20图	4区3層・4区4層出土土器実測、拓影图	28
第21图	1区2・3・4層、2区3・4層、3区1層・3層出土土器片錘実測、拓影图	30
第22图	4区2・3・4層出土土器片錘実測、拓影图	31
第23图	1区2・3・4層、2区3・4層出土土器実測图	32
第24图	4区2・3層出土土器実測图	33
第25图	4区3・4層出土土器実測图	34
第26图	1区3層、2区3・4層、3区2・3層出土土器製品実測图	36
第27图	1区3層、2区3・4層、3区4層、4区2・3層出土竹製品・木製品実測图	38
第28图	3区3層出土骨製品・木製品実測图	39

图表目次

第1表	2区3層出土魚類	44
第2表	3区3層出土魚類	45
第3表	2区3層、3区3層・4層出土哺乳類、鳥類、爬虫類	46

图版目次

PL-1	1区2層、1区3層出土土器	47
PL-2	1区3層出土土器	48
PL-3	1区4層出土土器	49
PL-4	2区3層4層、3区3層出土土器	50
PL-5	3区3層、4区2層出土土器	51
PL-6	人骨、鹿角、貝輪等	52

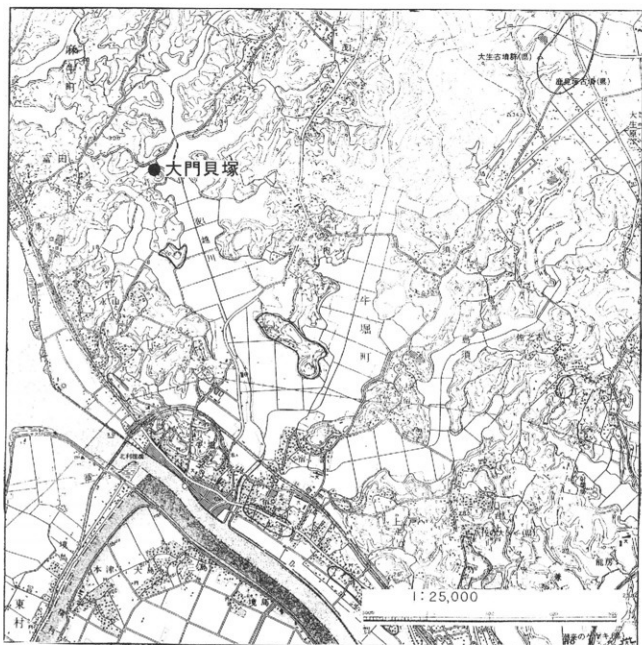
I 貝塚の位置と環境

本貝塚は麻生町粗毛字貝殻 266 番地他に位置する。貝塚の占地する台地は牛堀町清水や麻生町新原、富田仲台地区等に源を發し横利根川に注ぐ。夜越川に開折された支谷は麻生、牛堀にまがり開折された大小の谷津に面する台地には多くの遺跡が形成されている。

大門貝塚は、半島状の中段に位置。面積30a程の平坦部が存在し台地平坦部、斜面部に貝塚が形成されている。(第1図●) 貝塚の占地する先端部には、中世の長山氏の砦『永山砦』が位置し夜越川の沖積平野に囲まれた天然の『要害』で2曲輪からなる。

対岸の牛堀町には串越貝塚、赤羽根遺、原山A、B、C遺跡や日天月天塚古墳があった。西側の永山台地東A、B遺跡、築後遺跡、勘弥台遺跡、駒込貝塚等が見られる。

河口部分の上戸の沖積部には芝宿古墳群、芝宿遺跡が占地し今後の沖積地遺跡研究の素材が埋もれている。



第1図 大門貝塚位置図

麻生町では富田、粗毛の踏査が明確では無く周知遺跡は皆無に近い。

夜越川の沖積地は区画整理され、美田が広がり昔日の面影は無く、現在は農政の犠牲になり耕作や休耕田が広がり、区画整理の意義も薄い。

II 調査に至る経過

1. 調査に至る経過

- 平成6年7月1日 埋蔵文化財の所在の有無について（照会）があった。
- 7月8日 現地確認
- 7月8日 土砂採取が水貝建設より申請される。
- 7月8日 文化財審議会を開き審議する。
- 7月12日 埋蔵文化財の所在の有無について（回答）
- 7月18日 水貝建設との協議、発掘調査を行っても採取したいと旨。
- 7月11日 県庁行事務所より確認調査結果報告あり。
- 7月18日 水貝建設より調査担当者、予算の見積書届き三者で協議。同日届けを提出する。
- 8月18日 文化財保護審議会を開催。
- 8月19日 開発業者代理人（高惣設計）との電話打合せ。
- 8月24日 鹿行教育事務所担当社会教育主事へ連絡。
- 同日 汀 安衛氏へ電話連絡。
- 8月25日 開発業者代理人（高惣設計）との電話打合せ。
- 8月26日 教育委員会事務局内部打合せ。
- 10月5日 調査会発足。
- 10月8日 調査開始。
- 10月25日 現地調査終了。
調査途中隣地との三角形部分を残す、との事で全面調査は行わず約半分を残し終了とした。

2. 調査日誌（抜粋）

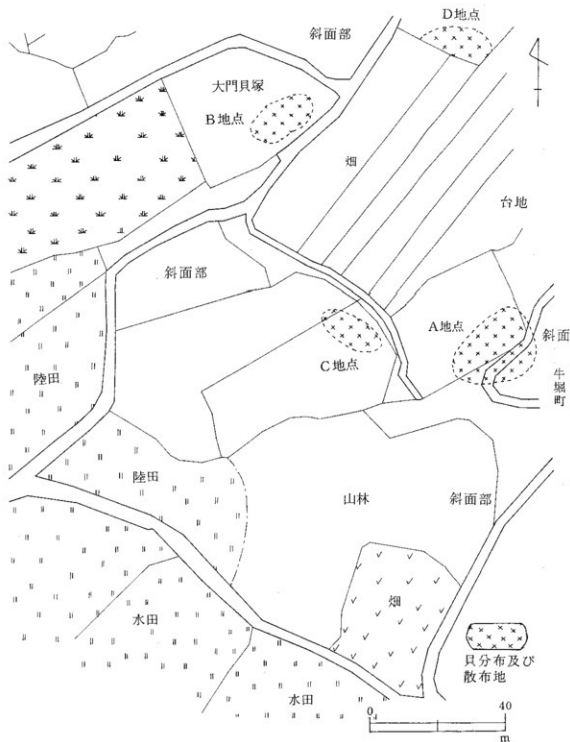
- 10月8日 調査開始、草木の除去、測量調査コンター25cmで作図。
- 10月11日 グリットの設定、遺存部を残し4m方眼のグリットを設定し調査開始。
- 10月12日 1区～4区を設定し貝層の下端を調査。
- 10月13日 1区貝層の端部、2区、3区は中央部分にあたる。
- 10月14日 雨天のため半日。3層純貝層は40cmと厚い。
- 10月18日 最下層、5層の粘土層を調査。薄く貝層より2m程流れる。
- 10月21日 地山層を確認し形成時期、期間がほぼ判明。U字状の窪地に形成された貝塚。
- 10月22日 全体の面積は40㎡前後で、貝層の調査はほぼ終了。
- 10月25日 出土貝類の運搬、2トンプで3台土糞袋で約650を伴出。
貝層の堆積から全体の約4/5近くを調査したと推察する。面積的には約4/5である。

III 貝塚の占地

はじめに

大門貝塚は、麻生町の富田地区と牛堀町永山地区に農道を挟みまたがる貝塚で「夜越川」の中程の半島状台地と斜面部に占地している。台地は麻生町に源を発する夜越川に開析された沖積地に約500m程伸びる。先端部には中世の永山砦跡が位置し、夜越川の西岸、東岸には多くの遺跡や古墳が存在していたが、現在は煙滅、一部遺存と消えつつ有る。

大門貝塚もその例外にもれなく壊滅的被害を受け満身創痍の現実である。行方台地南部域の代表的貝塚も現実、かつての面影はなくみるも無残な姿をさらしている。

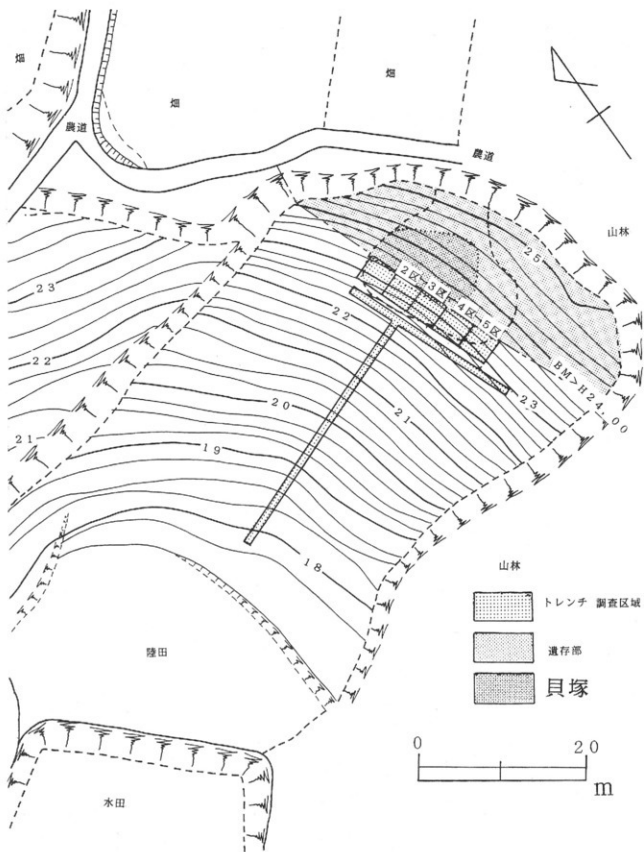


第2図 貝塚地籍

1. 貝塚

前述の通り農道を境に牛堀、麻生両町にまたがる本貝塚は、4ヶ所の地点貝塚群から成り総称して「大門貝塚」と呼称されている。今回調査を行なったのはC地点と呼称される地点で規模、時期は不明であった。平坦部約30a前後の台地斜面部にA、B、C、Dとほぼ東西南北に占地しているが仔細は不明である。麻生町遺跡地図に記載はない。

A地点は、畑地の陸田化が行なわれ壊滅的被害を受け、農道下の牛堀町域では土砂採取が行なわれ消滅、僅かに農道部分に存在が見られる。時期は採取される土器から加曾利E式期が推察され



第3図 大門貝塚C地点測量図

る。さも規模の大きい貝塚で純貝層が1m前後観察された。

B地点は北側の斜面に占地し一部埋積されているが遺存していると推察される。時期は散在する土器からはA地点同様加曾利E式期が推察される。貝層の埋積状態は不明。

C地点は、今回調査した地点で西側の斜面部に占地する。畑地面に一部露呈していたが調査時点では原野と化し不明であった。上部からの観察、ボーリング探査では8m×6m前後の小規模な貝層と推察された。時期は、散布する土器から加曾利E I式前後が推察された。

D地点は、東側の斜面に占地し一番傾斜の強い地点である。山林原野のため仔細は不明である。

今回土砂採取工事に先行し調査を行なったC地点は、傾斜角度30°前後を計り台地平坦部から3m程ガケに成りそれから傾斜面を形成し、そこに貝類が埋積され形成を見た。

2. 貝層と貝種

貝層は、畑地耕作面に認められた部分が中心部を形成し混貝層、純貝層、混貝層、混土貝層の単純な層序で形成されていた。貝層の埋積からは比較的短時間の形成が推察される。調査の結果幅18m前後、流れは8m前後が推測された。(上部は地形上保存するとの条件であったため測量のみで調査はしない。調査区域からガケ下迄5m程の距離が存在した事から勘案した)貝層末端部では混土貝層から土器片の混入となり基盤層に到達した。

貝類は、ハマグリ、サルボウ、アカニシを主体とした貝塚で腹足綱14種、掘足綱3種、斧足綱15種が認められた。また淡水産、微小貝類、脊椎動物遺体などが検出された。

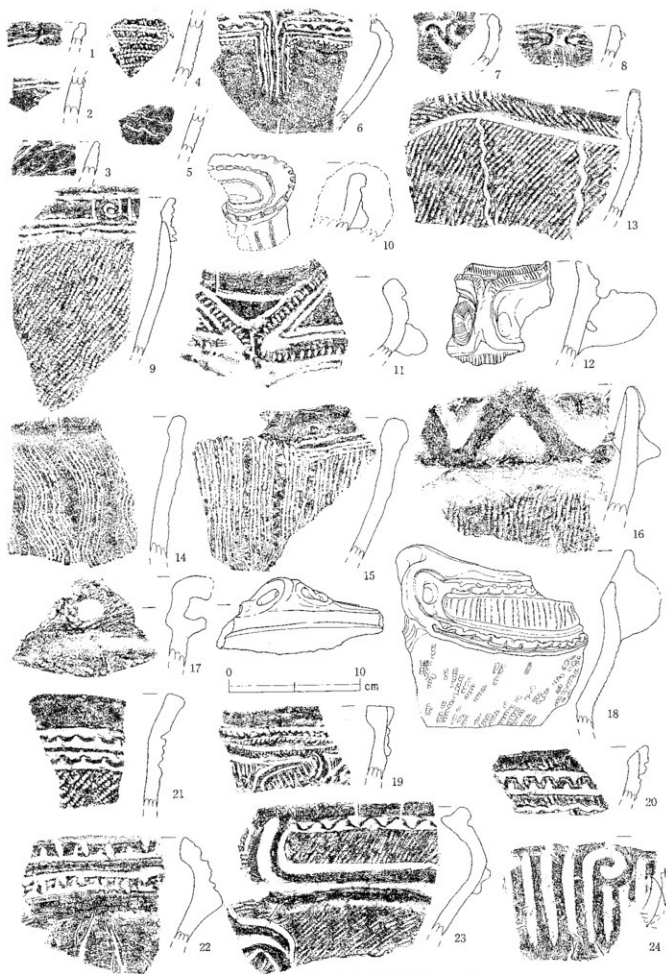
以下、貝層出土土器、出土骨類、脊椎動物遺体の概要を述べる。

3. 土器

本貝塚はグリッドによる調査方法をとった。以下、グリッドの層序にしたがって出土土器について述べる。

1区2層 (第4図)

本層からは図示した1~24が出土している。1~4は前期の土器で木層の主体を占める土器ではない。少量検出されている。胎土に多量の繊維を含む一群で平行沈線、まばらな結節文が施文される黒浜式である。5は胎土に細土、砂を含む土器で浮島式に比定される。6~24は中期の土器群である。6は深鉢で口縁部は「く」の字状に屈曲し外反か?、無文地に網状の沈線区画がなされ半截竹管による刺突文が連続している。五傾ケ台式に対比される土器である。砂、石英を含み器面はやや粗雑、内面は丁重に撫で調整がなされている。7、8は小型の深鉢土器で口縁部は内傾気味、無文地にYの字状、ハの字状に隆帯を貼付し口縁部は肥厚する8と口唇部に沈線を一条、胴部には逆U字状の沈線が施文されている。9は、隆起線文上に沈線を施し、口縁部との間に半截竹管による押引線文、釣針状文を配する円筒状の土器で器内は薄い。色調は暗褐色で少量の金雲母を含む阿玉台I式で内側に明瞭な稜をもつ、類例は少ない。10は深鉢型土器の突起部に刻み目、半截竹管の押引線文が円形に3列、また外側2列に施文されている。胎土に金雲母を含み色調は、褐色。11~13は隆起線文で区画し線の上に刻目文、半截竹管に押引による線文を複列配する11と隆起線の交合部に三角把手の12がみられる。何れも金雲母を含み褐色で口縁部は内傾する。阿玉台式の終末期の土器で12は中峠式。



第4图 3区2层 出土遗物实测·拓影图

13は口縁部が肥厚し弱い波状を呈し、胴部、口縁部に単節のRLの縄文を施す。金雲母を多量に含み、暗褐色を呈する土器。14、15は口縁部が肥厚し無文帯を持つ、胴部は櫛歯状工具による6本単位の条線文を持つ14と沈線文に近い15がみられる。褐色で胎土に多量の金雲母、細石を含む土器の深鉢。16は大型の隆起線文を山形状に口縁部に貼付する深鉢型の土器で内側に稜をもち、胎土は砂、雲母を含み器肉の厚い土器で類例は少ない。

本層の主体を占める15～24は口縁部が内傾、もしくは内傾気味の器形を呈し口縁部に幅の狭い無文帯を持ち、棒状工具による刺突で鋸歯状文を表出するものと幅広の沈線を口縁部から垂下させる24、外反気味の21、直立気味の19がある。これらは何れも加曾利E式として捉えられるもので大半はI式に該当する。胎土に金雲母を含み暗褐色。18は阿玉台式の新しいものである。

1区3層 (第6・7・8図)

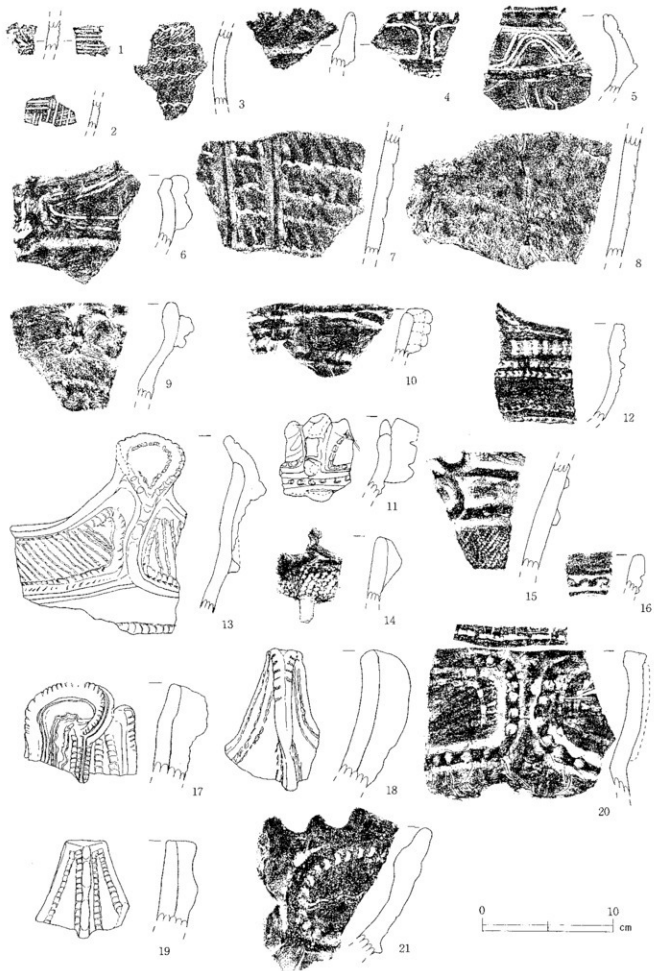
25からは3層出土土器である。アナダラ属貝殻腹縁による波状貝殻文を施す25は、前期浮島式である。本層では5片程の出土を見た。26～49は阿玉台式に該当する土器で器形は口縁部が強く外反する30、外反する27、29、直立気味のものが見られ内傾気味のもの、内傾するものが見られる。文様は角押文、大型の爪形文、棒状工具による連続刺突文、半截竹管による連続刺突文が隆帯にそって、または無文地に単独で一列、または複列施文されている。隆帯は窓枠状構成が主体を占める。口縁部は山形を呈するもの、弱い波状を呈するものものが多い。器面は無文地に施文するものが多く34は地文に無節Rの上に波状沈線を施文。口縁部には波状部に山形突起が見られる。27、31、32、34、35、40は胎土に少量の雲母を混入し褐色。その他は多量の金雲母を含み色調は暗褐色または黒褐色。31、35は同一個体。前者は棒状工具、半截竹管の押しきを一列、または複列に施文している。阿玉台I、Id、II、III式に該当する。本層の主体を占める土器群である。

41は環状把手状、太めの粘土紐の貼付等から、II-IVに該当すると推察される。胴部には竹管による有節線文が複列で直線、曲線に施文し少量の金雲母を含む。(第7図) 44は胴部で円形状区画がなされ半截竹管の押しきを隆帯にそって一列廻らし内側には鋸歯状の沈線文が施文され、少量の雲母を含む阿玉台III式。42、43、45～48は、隆帯にそった大型の爪形文、角押文を施し波状沈線文、有節線文を内部にもつ、口縁部は概ね弱い波状、また扇状の突起をもつ48、49がみられる。46、49は同一個体で6本単位の粗雑な櫛歯文が施文されている。43、48は同一個体。いずれも胎土に少量の雲母を含む。51は口縁部に三角状の隆帯をもち弱く内傾気味で単節のLRをもつ。47～52は中峠式に比定される一群で口縁部は概ね弱い波状を呈し外反気味の器形である。52は隆帯、区画内に縄文を施し口縁部は肥厚し弱く内傾、色調は灰褐色に近い。53は直立気味の器形で勝坂式土器。

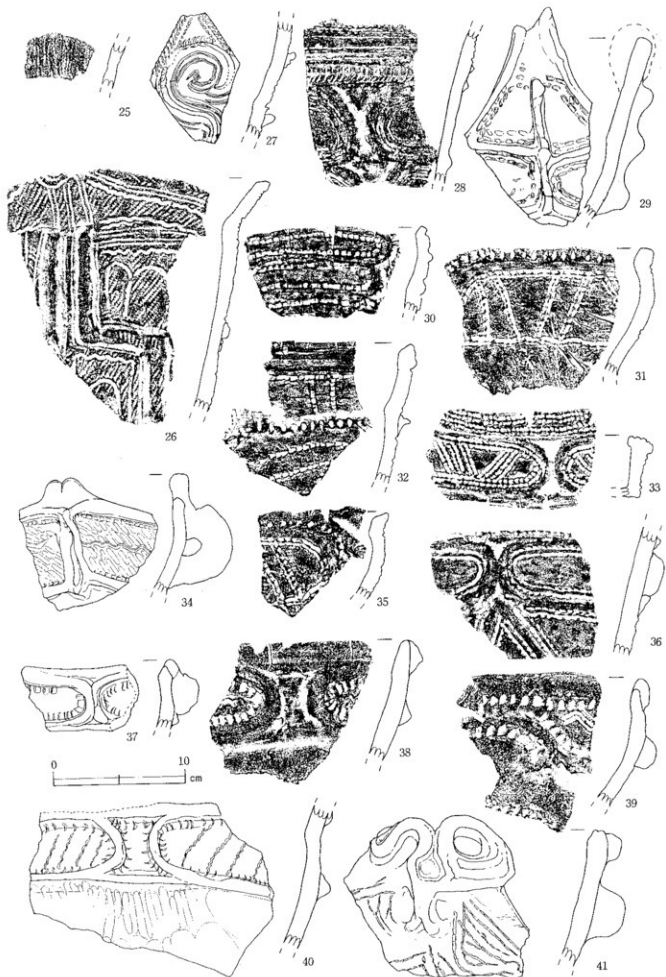
口縁部に幅広の磨消部をもつ55、56と山形の突起をもつ59は内傾、通孔をもつ60、扇状の変形気味の57があり太い隆帯で文様を表出する。58も同様で渦巻状に隆帯を貼付、通孔をもち沈線が巡り区画内にはアナダラ属の貝殻文が施文される。器形は内傾する大型の深鉢か、極少量の雲母、石英をふくむ。57、59は中峠式土器。56、58、60からは加曾利E1式。山形突起と隆帯に刻み目をもつ59は中峠式。63は阿玉台N式。

64～67、69は、口縁部に幅の狭い磨消部を持ち隆帯や幅広な沈線で渦文を表出する。器形は概ね弱い波状ないし平縁に近い。胎土は雲母の混入は少なく加曾利E式土器。

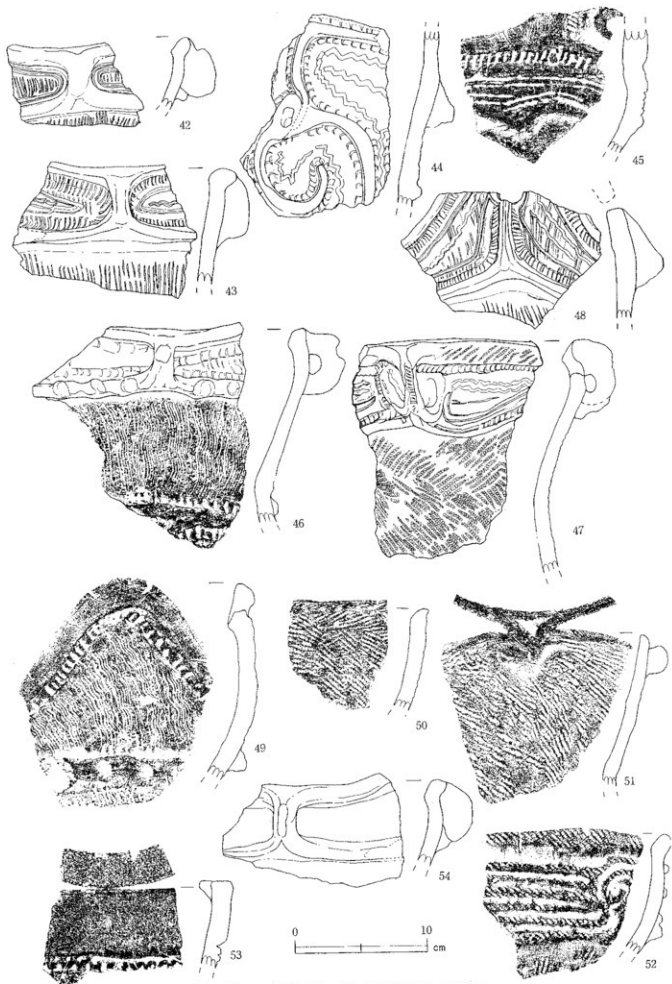
底部は円筒状深鉢と浅鉢型底部が、それぞれ見られ量的には円筒状器形が7割りを占めた。



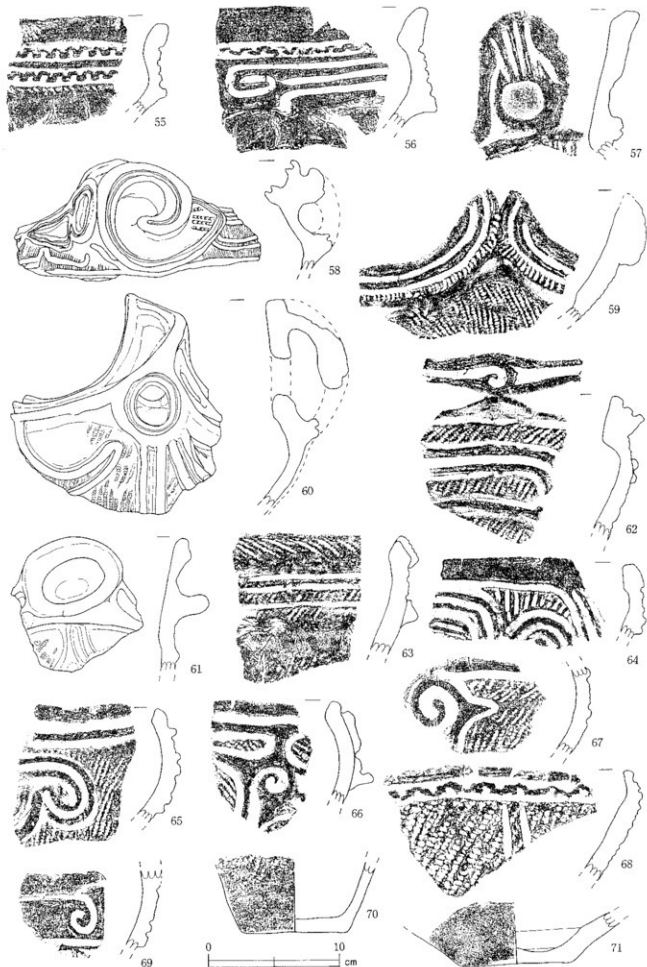
第5图 3区3层 出土遗物实测·拓影图



第6图 1区3层 出土遗物实例·拓影图



第7图 1区3层 出土遗物实测·拓影图



第8图 1区3层 出土遗物实测·拓影图

1区4層 (第9・10図)

最下層で、混土貝層で貝は形態を留めるものは少ない。土器の包含層に近い。

出土した土器の量は3層と変わらない。72～75は隆起線文、また隆起線文に沿って1列の角押文、半截竹管押引文を配する一群で雲母の混入は少なく、器形は弱く内傾、または外反気味である。阿玉台式Ⅰa式。

77～79は、隆起線文に沿って角押文、半截竹管押し引き文を1、2列配するもので器形は内傾するもの、キャリバー状のものや弱く外反気味のものが見られる。胎土には金雲母が少量含む。器形的には隆帯線文区画に有節線文を配する78、79がある。阿玉台式Ⅱ式。隆起線文による区画の76、77、81と大型の爪形文を隆帯に沿って配する83～85も同様。本類も胎土に少量の金雲母を含む阿玉台式Ⅱ式とⅢ式。

80は口縁部に頂を持ち又状の削り込みが見られる阿玉台式式直前様の相呈する土器であり類例は少なかった。

大型の突起をもつ86は口縁部を大きく内湾曲させて山形状突起をもつ。太い隆起線によって区画し沈線に沿わせ5本単位の疎らな沈線を施す土器で阿玉台式Ⅳ式。

第10図87は扇状突起の変形で内面に3本単位の沈線が施文され、口唇部に縄文が施されている。阿玉台式の土器。88も同様？小波状の口縁部に瘤状の突起をもち胎土は雲母を含まない。

89は大木式との関連で捉えられる土器でS字状隆帯にRLの縄文を施文、胴部も口縁部同様に施文する。大木7b式平行の土器。90は山形の突起に通孔をもち口唇部、胴部にLRを施文、91は平縁で口縁部に磨消部をもつ。本類も大木系の一群で出土割合は少ない。口縁部に瘤状の突起をもつ94は突起左右で刻み目文、沈線と差異が見られる。胴部は沈線を垂下させる大型の深鉢で口縁部には刻み目文が施されている。阿玉台式式系の土器である。95も大型の浅鉢で器面は磨消され口縁部は、厚く口唇部に沈線が浅く施される。阿玉台式の無文土器。92、93は円筒形深鉢の底部である。

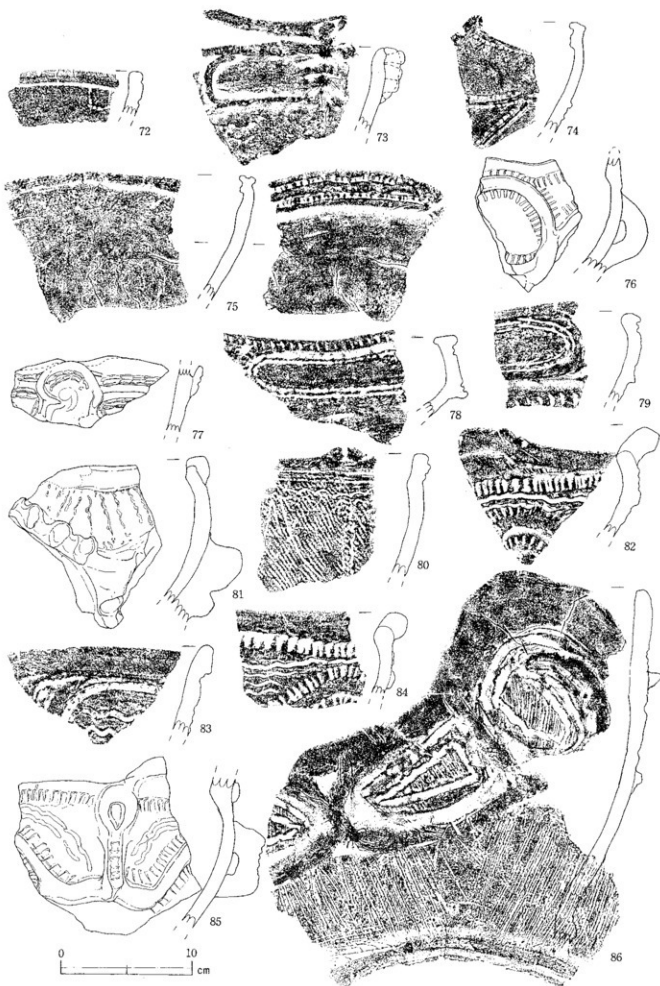
96～101は大木系の色をもつ一群で口縁部の直立気味と内湾気味、キャリバー状と見られる。いずれも隆起線文を用い文様を表出している。窓枠状、渦文、S字状がみられる。加曾利EⅠ式である。102は器面の磨消された小型の浅鉢で口唇部に細い隆起線文が見られる。

2区3層 (第11・12図)

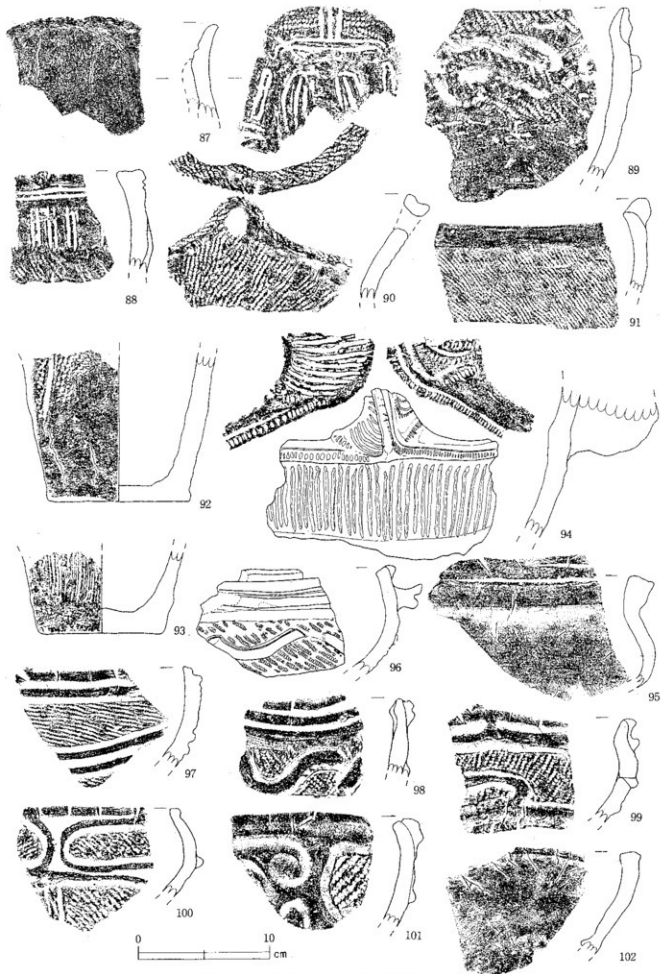
本調査区は凹地気味で畑地による脱乱が見られ2層は混土層、攪乱層が混在し3層から図示した。比較的遺物は少ない。貝層は良い状態が認められた。

1は半截竹管押し引き文で円形状モチーフを構成、隆帯で窓枠状区画がなされ間に円形玉が添付され、いわば玉抱きの構成をもつ。2、3は隆起線上に刻みをもち上下に半截竹管による沈線が巡る。口縁部は、波状を呈し幅の狭い磨消部が巡り中峠式に近い土器である。4は山形状突起をもつ土器で半截竹管による沈線が山形や弧線、渦巻き状が描出されている大型の深鉢形土器である。別系統の土器である。1は阿玉台式Ⅰa、2はⅡ式、3と4はⅢ式。

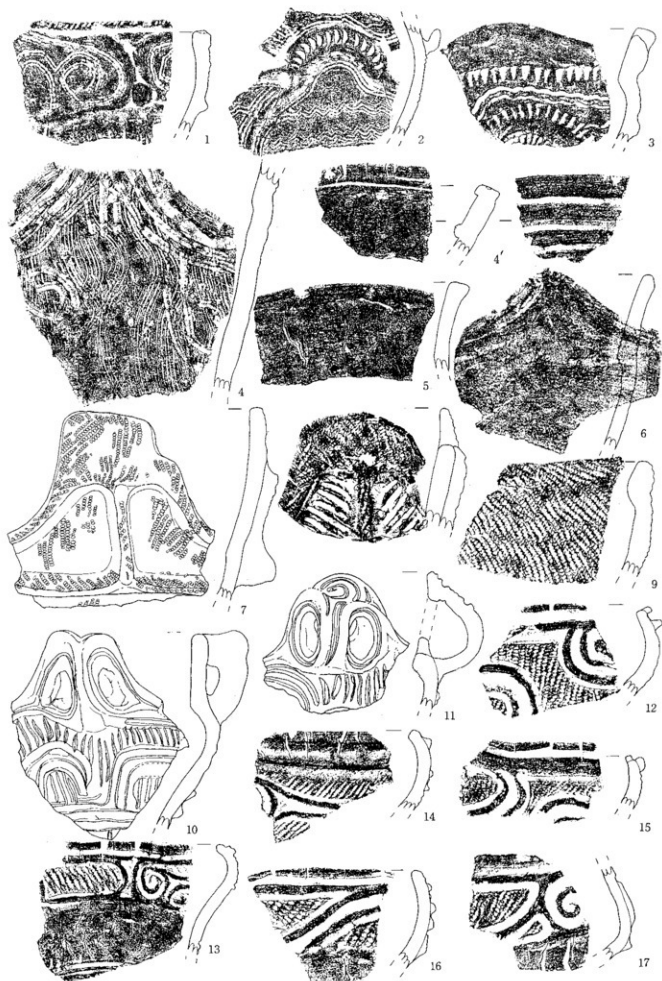
4は器内の厚い土器で口縁部、口唇部に一条の沈線をもち内側に隆起線をもつ土器で、浅鉢形の土器。器面を磨消する5は口縁部が弱い波状を呈し口唇部が肥厚、外反する。6は山形の突起部をもつ深鉢形土器で口縁部は外反、内側に顕著な稜をもつ。5、6は阿玉台式Ⅳ式土器。器面に単節のRLをもつ9は口縁内側に張をもつ大木7b系土器？。



第9图 1区4层 出土遗物实测·拓影图



第10圖 1区4層 出土遺物実測・拓影図



第11图 2区3层 出土遗物实测·拓影图



第 12 图 2 区 3 层 · 4 层 出土遗物实测 · 拓影图

7、8は扇状突起をもつ阿玉台Ⅵ式口縁部で単節の短いRLの縄を施文している。

10～17は加曽利E式土器で突起部に穿孔、幅広の沈線をもつ10、11は古手の土器で11は渦文状構成をもつ。口縁部がキャリバー形器形をもつ12～17は隆起線文による円形、窓枠状、渦文が施文され、いずれも口縁部に幅の狭い無文帯が巡る。

12図18は大型の深鉢形土器の底部で器肉は厚い。

2区4層（第12・13・14図）

19から4層出土土器で、前期から中期後半の時期のものが主体を占める。19は胎土に繊維を含む器肉の薄い土器で器形は小型の浅鉢か。有節線文、ハマグリによる波状文が施文される土器である。田戸下層式？。

20は胴部破片でアナガラ属の波状文を施文する浮島式胴部破片で何れも本類は少なく1%前後を占めた。

無文地に半截竹管による有節線文や角押文状の施文が見られる21、22は器肉は薄く口唇部は三角形状で胎土には砂の混入がみられる。半截竹管による押引文をもち胴部に刻目文を配する21は大型で器肉は薄く胎土に砂をやや多く含む。阿玉台Ⅰ式。

23、27は隆起線文で区画し有節線文が一列巡る。器肉は概して大型の割りには薄く胎土には砂の混入が多く大型の深鉢型土器で本列は2割り前後である。阿玉台Ⅱ式の古。

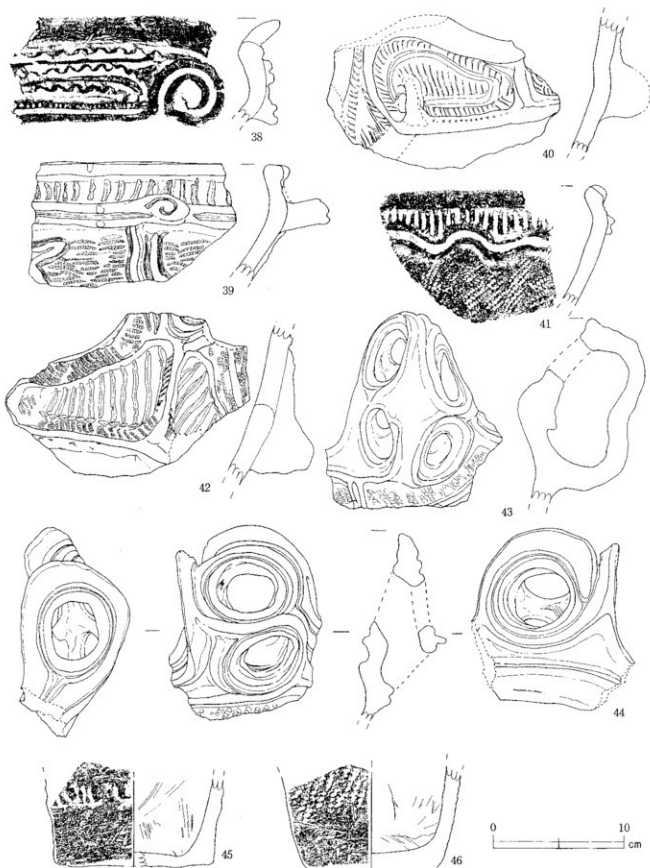
口縁部が内傾し内側に顕著な良もつ25は、隆起線文で区画しこれに添って角押文が巡る。胎土には金雲母をやや多量に含む土器で阿玉台Ⅰ式の新で本層出土土器の15%前後を占めた。無文地に隆起線文で区画し、これに添って押引文を施文する26は胴部で、金雲母を多量に含む。大木8b系の土器で、本類の出土量は少ない。阿玉台Ⅰb式。

山形の把手に叉状の切り込みが入る24の例は少なく。大木8b系の土器である。28表裏、左右の施文が対照的な鳥の頭、土偶的感の把手で太い隆起線の上には刻み目文で中は、半截竹管による沈線を施す。内側は刻み目と刺突文で中は有節線文を複列配する。出土類例の少ないⅡ-Ⅲ式土器。

太い隆起線文で縁どり中にも複列の隆起線を配する大型の扇状把手を配し、線間に爪形文を施文する。山形状の変形か、29は出土例は少ない部類で胎土に金雲母を多量に含む阿玉台Ⅲ式。隆起線文の上に縄文を配する30は所謂扇状で把手をもち間に渦文を配する。胎土は金雲母が皆無に近い。阿玉台Ⅳ式。大型の深鉢形土器で山形状の突起を持ち突起部に耳状形態をもつ32は円形部分の隆起線の上に刻み目を施し円形内部に沈線をもつ中峠式。31は壘の目状の円形刺突を持ち囲む隆起線はやや細く縄文を施文している。山形把手の谷間に付く本例は少く大木式系統の土器。33、35、36、38、39は口縁部が小波状か小突起をもち隆起線の上に沈線を加えるものやS状、または渦文をもつ胎土に少量の雲母を含む。器形は円筒状、口縁部が内傾もしくは直立気味のものが見られ、本類は比較的多く出土している。大木8b。36、38、40は中峠式である。41、42は山形の把手と隆起文、沈線をもつ阿玉台Ⅳ式。

通孔をもつ43、44も同系列の土器群であるが寄り加曽利E式に近い要素をもつ一群の土器で孔部周辺に沈線をもつ。

45、46は底部で何れも大型の深鉢底部である。前述の深鉢群の上器底部である。43、44は加曾利E1、47は勝坂式。50、51は阿玉台N式、49、53は加曾利E式。本層の主体を占める土器群は阿玉台式から加曾利E1式と推察される。



第13図 2区4層 出土土器実刺・拓影図

3区3層 (第5・14・15図)

本区は、貝塚中心からやや南側にずれ込む。地山は南側に向って僅かずつせり出してくる為貝層の堆積もやや薄くなる。本地区では1層が確認出来たが遺物は僅かであった。

土器

若干の攪乱も見られたが混土貝層のため遺物総数は少ない。胎土に繊維を含むものも少量見られた。器面表裏に条痕をもつ土器で前期前半の茅山式の範疇と思われる。やや外反気味の口縁部を呈し、深鉢と推察される土器は胎土に砂、石英を含む土器で2段の縄文の上に結節文を縦位に施文している下小野式と思われ、本類の出土は少ない。

無文で内側に有節線文を窓枠状に配し、口唇部に棒状工具で押圧を加えるものと輪積痕を明瞭に残すものが見られ、隆起線を縦位に垂ドさせる阿玉台I式の古い部分も見られた。細い隆起線文で区画し、有節線文を単、復列配し胎土に金雲母を含むものは外反するものとキャリパー状器形を



第14図 3区3層 出土土器実測・拓影図

呈するものが見られ、阿玉台Ⅰ式。

また、無文地に隆起線を配し瘤状部分に押圧、刻み目を入れる土器もあり多量の金雲母、石英を含み器形は弱いキャリバー状を呈する。外反気味の口縁部をもち、口唇部は角張り円形の玉が添付される。土器は胎土に多量の砂を含み器肉の薄い土器で大木7b系の土器もある。また、角押文を施文するものもある。瘤状部分には刻み目が施されている。内側に隆起線文が波状に添付される。

内側に顕著な稜をもち胎土に多量の金雲母を含み土器で環状把手をもつ土器は、大型の爪形文をもつものが見られ、隆起線による区画がなされている。区画内に節線文、又は爪形文が斜位、横位にそれぞれ施文されている。

その他は渦文をもつ土器で雲母の混入は皆無で隆起線文、沈線文を施文する。加曾利EⅠ式土器もみられた。

3層出土で山形状把手の頂部に環状を貼付し、山形把手に隆起線文を貼付、ほぼ同様で有節線文を復列、角押文は施し、胎土には石英を含むものが見られた。金雲母を含み、阿玉台Ⅰ式と思われる土器もある。

隆起線に押圧を加え区画内に復列の角押文、口唇部の内側にも施す。器形はやや外反する大型の深鉢と推察される。胎土には雲母は皆無で砂を含む。大木式系統の阿玉台Ⅰ式。鋸歯状にカットされた口縁部をもつ土器で、隆起線による窓枠状区画がなされ大型の爪形文が配列され内側には顕著な稜をもち、胎土に金雲母を多量に含むものもある。

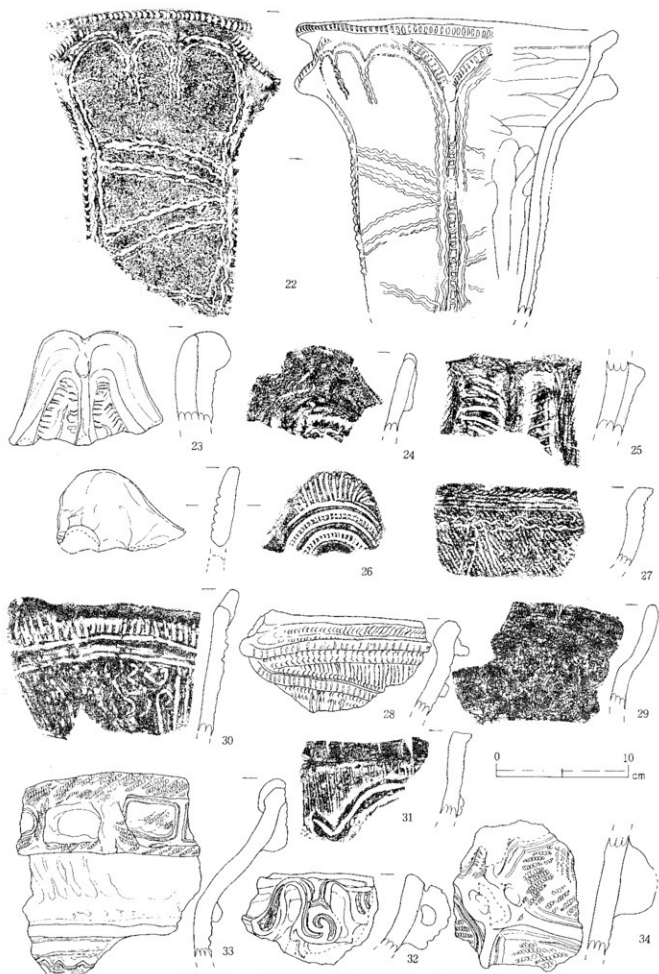
第15図22は胴部下半部が欠失する深鉢で、器形はY字状に隆起線を等分に4本配列、口縁部では弧状文を構成し垂下させている。口縁部は隆起線文上に細かな刻みを施す。隆起線文に添って弱く曲がる沈線を単、隆起線文間は復列垂下させ胴部は横にV字状に施す。胎土には少量の雲母と石英をやや多く含み、器肉は薄い。阿玉台Ⅱ式。

扇状把手の23～26は山形状で又状、V字状?の23は隆起線区画内側に爪形文、円形状の24は爪形文、沈線をもつ26は、外面は不明であるが内側に沈線で円形に区画し爪形文を口唇部に沈線を施す。何れも胎土に砂、石英を含む。25は一部欠失しているが隆起線上に縄文が施文され、区画内部には左側には太い沈線、右側はヘラ状工具による線状沈線が施文され、胎土には金雲母を含む。阿玉台Ⅲ式。26は勝坂系土器。

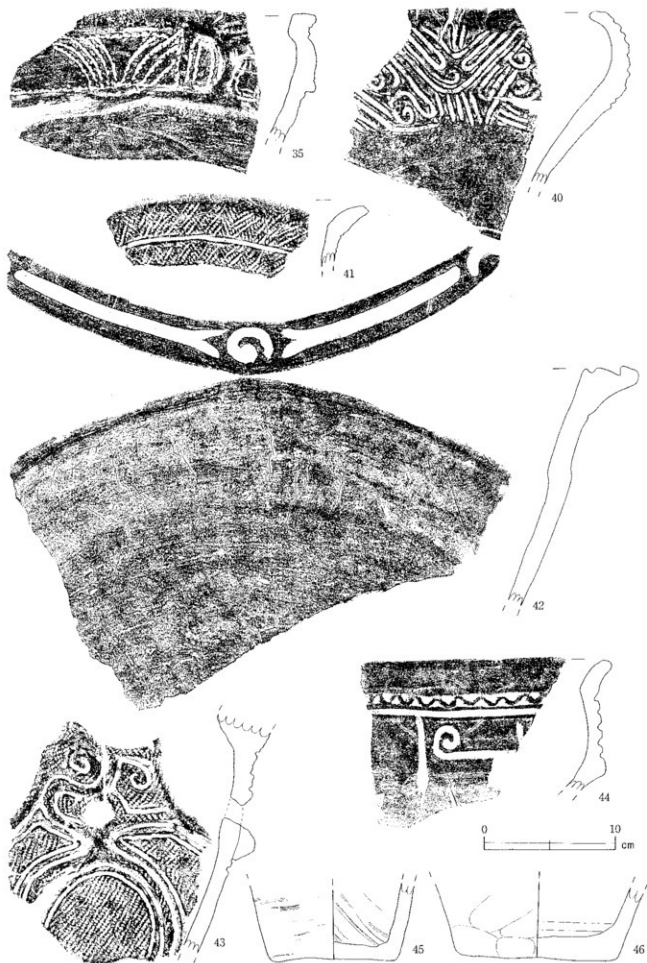
隆起線文上に細かな刻み目文、半截竹管による押形文をもつ28は深鉢形土器で内側に明瞭な稜をもつ勝坂系の土器。29は阿玉台式に伴う無文土器で器形は深鉢形で円筒胴部からやや外反する口縁部は弱く内傾、口唇部は丸みをもつ。胎土に雲母、石英を多量に含む阿玉台式土器。27は口縁部の隆起線の上に縄文を施文し胴部にも地文としてRLの縄文をもち、口縁部したには復列の有節線文、半截竹管による波状沈線を横位に、また2条の沈線を垂下させる。胎土には金雲母を含む。阿玉台Ⅰ式。

30は円筒状器形で口縁部には小把手をもつ、隆起線間に沈線を縦位に、また沈線を入れる。胴部は幾何学状に沈線が施文され、胎土に石英を含む。阿玉台Ⅳ式。

31、32は隆起線上に隆起線を施文、橋状把手の上にも渦文を表出している。角張り気味の器形の31とV字状モチーフをもつ32は金雲母を多量に含む。器形は内傾する。大木7b、大木8b式。大きい隆起線で文様帯を区画する33、34は口縁部に隆起線の上に縄文を施文し区画内に窓枠状に沈



第 15 图 3 区 3 层 出土土器实测·拓影图



第 16 图 3 区 3 层 出土土器实例·拓影图

線を巡らす。胴部の34は、刻み目文、区画内には半截竹管による沈線が見られる。平縁で大型の深鉢形土器の35は隆起線で区画し有節線文で復列、または4列V字状に施文される。胎土に雲母、石英を含む。阿玉台I b式。口縁部はキャリバー状を呈する稜は顕著。33、34は阿玉台IV-VI式。

口縁部が強く内傾する40は、沈線で渦文を幾何学的に口縁部から頸部に施文、胴部は磨消している。類性の少ない土器である。胎土には砂の割合の多く雲母はない。42は大型の浅鉢で外面は磨消され、口縁部は外反し口唇部に幅の広い沈線を肉掘的に施し6ヶ所の渦文を配している。胎土には雲母、石英が多量に混入される。加曾利E I式。45、46はこれらの底部。

隆起線で区画し線上に縄文を施文、扇状把手や一部に通孔をもつ一群の48、50と外反する口縁部に隆起線をもちLRの縄文をもつ52が見られた。隆起線に添って沈線を単、腹列又は、渦文を描出し多くは縄文を充満する。43は阿玉台IV式、44は中峠式、42は加曾利E I式である。

4区2層 (第17図)

本区は、調査区の南側に位置し地山が上がり貝層の堆積は薄くなる。2層からの検出である。本層では土器の出土は少なく図示出来る個体も限られてた。1は口唇部に棒状工具による刻み目をもち、幅の狭い無文帯が口縁部を巡る。沈線区画内に大型の爪形文をもつ。胎土に多量の砂を含み内側に弱い稜が見られる。2は、細い隆起線上に棒状工具による刻み目を入れる。やや内傾する口縁部で隆起線のあいだは鋸歯状沈線が施文され内側に顕著な稜をもつ浮島式、阿玉台I b式の手法である。

口縁部を欠失する3は、有節線文で弧線文等の文様を描出し7は、角押文で区画ともに無文地に施文している。やや内傾気味でともに砂と石英を多く含む。阿玉台I b式。口縁部は角張り隆起線を貼付する8は竹管刺突が見られ内側に顕著な稜をもつ。胎土に多量の砂を含む。9は胴部破片で短く線状の沈線を施し胎土に雲母を含む。器形は胴部下半部が弱く膨らみ鉢状の土器。

太い隆起線で区画する4、5は口縁部は、平縁もしくは弱い波状を呈する。区画内には半截竹管による爪形文や有節線文を施文する4は、胴部にY字状に貼付し指頭による押圧を加え程度に金雲母を多量に含む。隆起線に沿って半截竹管による押し引文、角押文を疎らに施す5は胎土に石英、砂を含む。器形は円筒形胴部から弱く外傾する。阿玉台II式。口唇部が角張り内側に瘤状に伸びる6は、口縁部に狭く無文帯を沈線出区画する。胎土に金雲母を少量含む小型の鉢状器形か。胎土に多量の金雲母を含み口唇部に隆起帯を貼付し沈線による文様?を施す。11も同様な文様構成をもつが口縁部にはRLの縄、胴部はLRの縄が施文されている。内側には顕著な良もち10は弱い。胎土には雲母、石英を含む。阿玉台中峠式。

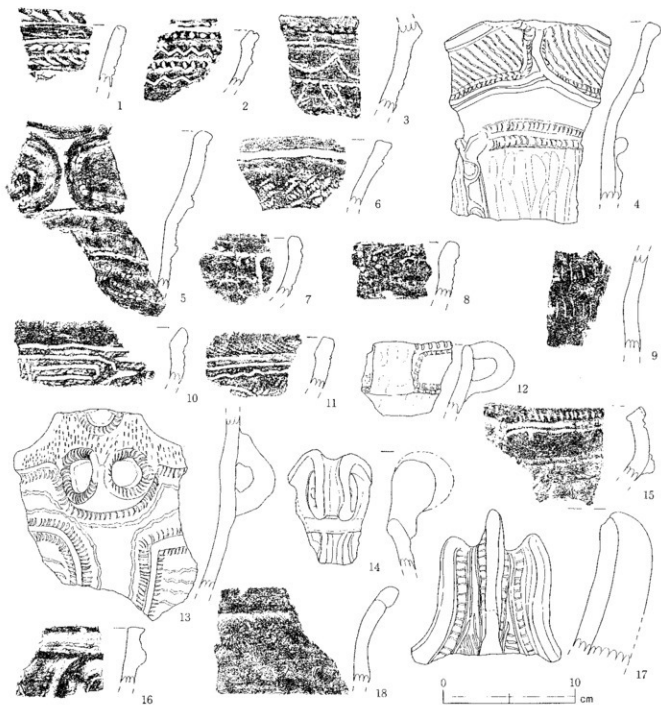
橋状の把手をもつ12は隆起線上に棒状工具による刻み目文、隆起線に沿っては角押文を施す。胎土には砂の混入が多い阿玉台IV式土器。

山形把手をもち隆起線で区画、隆起線両側には爪形文を密に配し、有節線文で区画した無文帯を作り出す。波頂部下には環状に通孔をもち、横部には爪形文が施される13は、口縁部にはへら先による刺突が細かく施文されている。内側には稜をもち胎土には砂の混入が多く、阿玉台IV式。14は粘土組で蝸牛を模したような把手部で橋状部分には渦文をもち、内側には顕著な稜をもち、胎土に石英を少量含む。

隆起線上に刻目を入れ押し引状角押文を復列配する15は口縁部キャリバー状で胎土に多量の金雲母を含む。口唇部は内側にカットした感じで扇状を呈する。阿玉台Ⅳ式。

扇状手に鶏冠状に中央部に貼付する17は、間に爪形文、沈線を施文する。胎土に多量の金雲母、石英を含む。阿玉台Ⅲ式。

18は、口縁部に隆帯をめぐらし外反する器形で無文、胎土に多量の金雲母、スコリアを含む土器で阿玉台式の新しい時期。



第17図 4区2層 出土土器実測・拓影図

4区3層 (第18・19・20図)

純貝層の本層は4区まで伸びていた。従って本層がさもまとまった土器が見られた。

土器は、第18図に見られるように主体となるものは阿玉台式～加曾利E式前半の土器群であった。胎土に多量の繊維を含む1は半截竹管による沈線が施文される田戸上層式。

口縁部に板状把手をもつもの、隆起線で窓枠状区画をもつものがある。何れも有節線文、角押文状を呈する半截竹管押し引文を復列配する。2は把手部分と垂下する隆起線上に押圧を加え胎土に金雲母を多量に含む。3は有節線文を間をおいて復列施文し、覆土に金雲母を含む。内側には稜をもつ。4は隆起線を口縁部と胴部に配し胴部は波状？半截竹管による弧線文が施文され、胎土には少量の雲母を含み器形は口縁部が内傾気味で口唇部にも有節線文が施文される。阿玉台I b新式。I bの新しい時期。

環状把手、渦文把手をもち口唇部に棒状工具による刻みをもつ5、6は隆起線に沿って有節線文、鋸歯状沈線をもつ5と無文地に有節線文を施す6が見られ胎土に金雲母、石英を含み器形は、口縁部が内傾し器内は薄いI b式。10は弱い隆起線、縦位の有節線文、口唇部の棒状工具の刻み目等阿玉台I a式の特徴が見られる。9は山形突起が見られる口縁部。

大型で隆起線で窓枠区画がなされる土器群で8のように口唇部に棒状工具の刻みを入れるものもあり、7は波状口縁部で隆起線の重なる部分でV字状を呈する。11は深鉢形土器で隆起線で狭く長い窓枠状に区画し角押文を一例配する。胴部にも復列の隆起線が貼付され口縁部は弱く内傾する。口唇部V字部分には円形玉を抱く。阿玉台I b式。

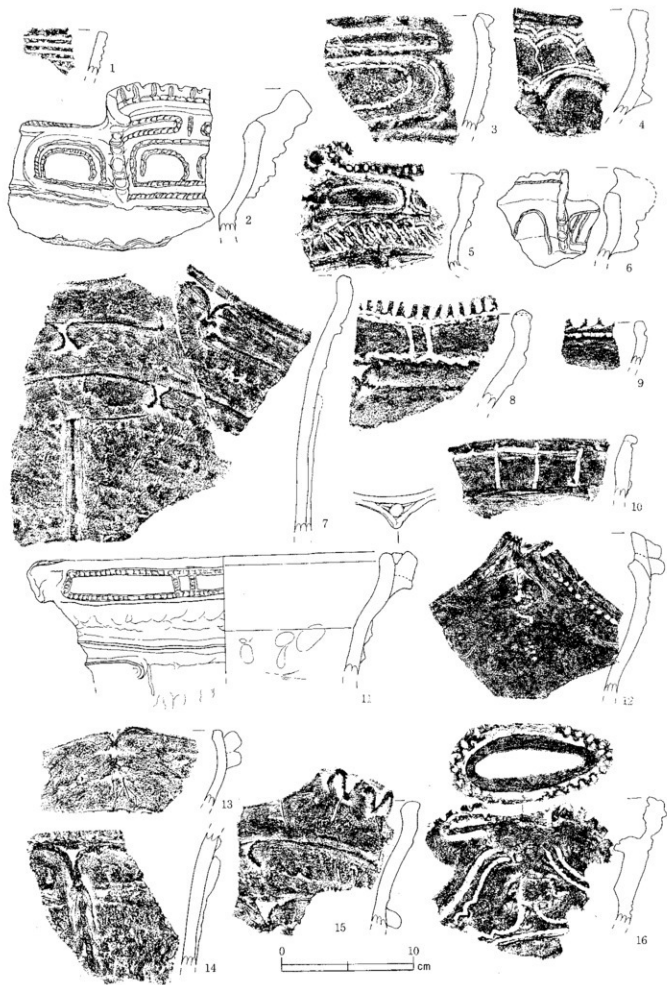
山形把手の12は頂部右側に2ヶ所の刻みを入れ無文地に有節線文を波頂部から垂下し、また口縁部に沿って左右にも施文する。頂部には突起に貼付し刻みを入れ内側にはヘラによるY字状文を刻む。器形は内傾気味の口縁部をもつ深鉢。緩やかな波状口縁部で瘤状突起の口唇部はV字状を呈する13、平縁と推察される14は無文地に口縁部から隆起線でY字状に貼付する。胎土は砂の混入が多い。阿玉台I a、I b式。

15は山形把手に部分に細い隆起線でV字状に貼付し7に近い文様構成をもつ。胎土に砂の混入が多く内側に稜をもつ。第19図21も本類に入る。阿玉台I a古式。

16からは大きく太い隆起線を貼付し環状、または突起と復列の有節線文、爪形文、沈線を復列配する一群で口縁部は山形、突起、双頭状が見られる。胎土には金雲母を少量含む。無文地に隆起線によりY字状に貼付し、これに沿って疎らな刻みを入れる21と半円形の把手をもつ24、25がある。隆起線区画内側には半截竹管による沈線、押し引文等を施文し胎土には金雲母、石英を含む阿玉台I bと、II・IV式。山形把手の上貼付されたと思われる25は三角形で内側を除く三面に押し引文が2列施文され雲母、石英を含む。環状の把手をもち三角状の孔部をもつ26は半截竹管押し引文が配される器内の薄い土器で多量の雲母を含む。阿玉台III式。

長い口縁部をもつ28は「く」の字状反する器形で口唇部に単節RLを施文、口縁部にはLRを施文する。胎土に多量の金雲母を含む阿玉台III式。無文で口唇部に刻み目をもち胎土に金雲母を多量に含む。27の器形は、口縁部が内傾する浅鉢形の土器。

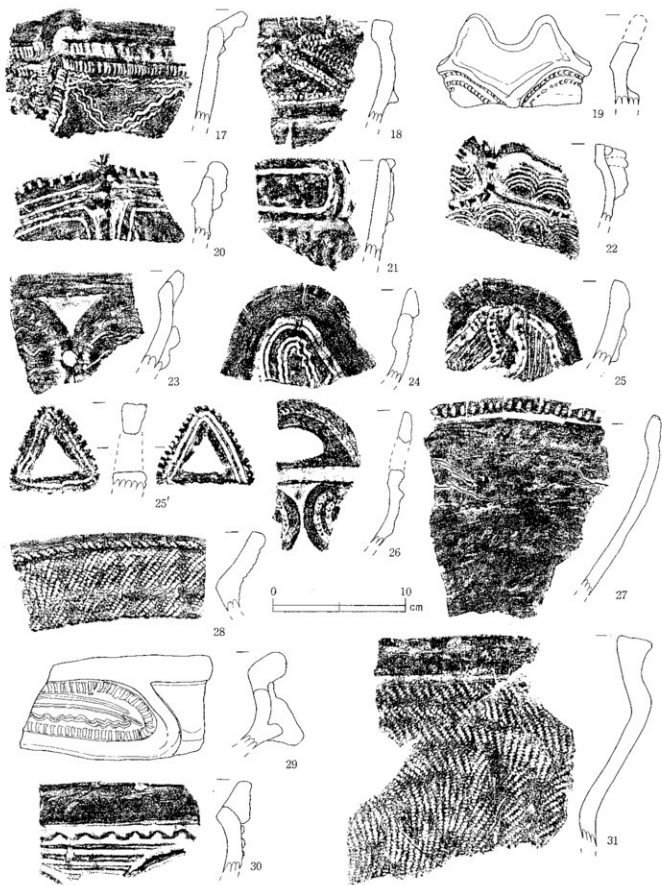
口唇部が肥厚、幅の広い29は太い隆起線に区画された内側に爪形文を一例、内部には波状沈線、沈線が施文され器形は口縁部が内傾し口唇部は外反、胎土に石英を含む中鉢式土器。30も口縁部に無文で沈線隆起線で区画か、口縁部外反し顕著な稜をもち少量の石英を含み焼成の良い土器で阿玉台IV式。31は大型の破片で器形は円筒形胴部から外反し頸部で括れ内傾し、口唇部は外反



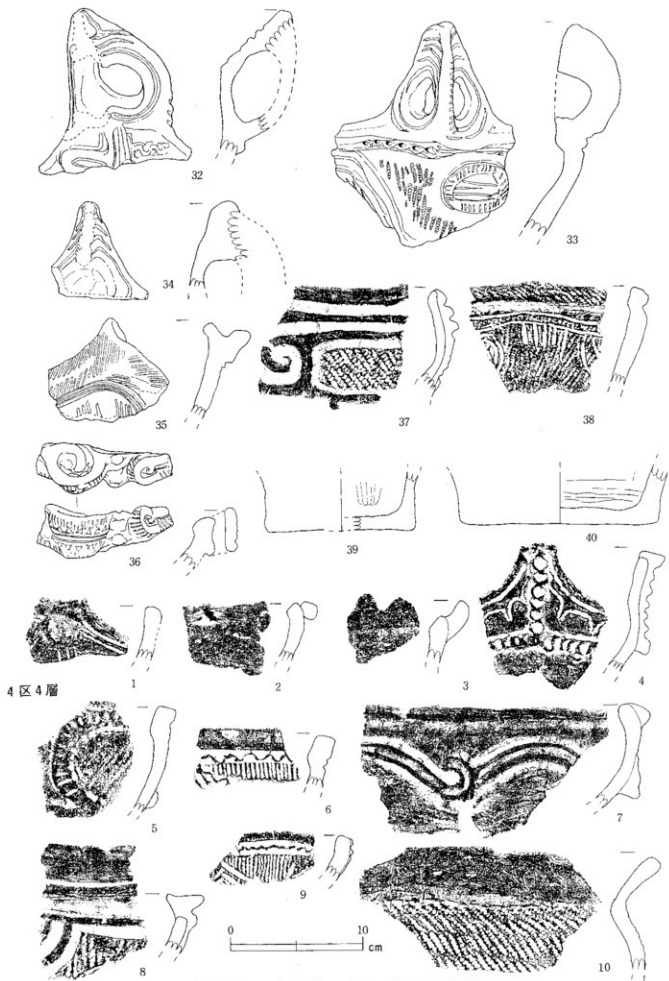
第 18 图 4 区 3 层 出土土器实测·拓影图

する。口縁部は磨消され無文。胴部はLRの縄文を施文している。大木8b式。

第20図32～35は鶏冠状の把手をもち、通孔、沈線、隆起線区画をもち色調は淡い黄褐色で胎土は石英を少量含む。口縁部キャリバー状器形。加曾利E1古式。34は小型の鶏冠状32に酷似する。



第19図 4区3層 出土土器実測・拓影図



第20图 4区3層・4層 出土土器実測図

山形状把手で口唇部に渦文状に沈線を施文し隆起帯には無節の縄を施文。石英、細石を含む。36は勝坂系の口縁部把手で三角形刺突、沈線、口唇部に渦文をもつ胎土に石英、細石を含む。37は窓枠状区画に渦文をもち口縁部キャリバー状の加曾利EⅡ式。32～34は中峠式、35は阿玉台Ⅳ式。

38は、口縁部の隆起線上にRL、胴部は地文にLRを施文し乱れた沈線が横3本、縦位に練らに5本みられる。小型の浅鉢形土器か。胎土には雲母、石英、細石が混入、色調は淡い赤褐色。大木系土器か。39、40は大型の底部で39はやや開き気味、40は開いて立ち上がる。阿玉台式の底部。

4区4層（第20図）

1からは4層出土の土器で遺物は少ない。混土具層で下部は地山である。

小型の扇状把手と2の突起、山形突起の3が見られる。何れも小型の鉢形器形で無文地に口唇部に沿って2列の押し引文、頂部からの3本の沈線を垂下されている。胎土は砂を含む。2は突起上下にV字状「凹」が見られる。器面は無文、胎土は砂が多く口唇部は三角形状で尖る。阿玉台Ⅰ式。山形に又状刻みが入る。器面は無文で胎土に金雲母を多量に含む。阿玉台Ⅱ式。

山形把手上部には3本の沈線、隆起線上には爪形文と押圧文をもち区画された無文地に有節線文を弧線状に施文する。器形はやや外反気味で胎土には砂が混入されている。阿玉台Ⅱ式。隆起線上に刻み目文、区画内には有節線文と沈線が施文される。器形はやや内傾し口唇部は外反気味の5は胎土には金雲母を含む。阿玉台Ⅱ式。

6は、口縁部が磨消され肥厚し角張る。胴部は縦位の沈線と隆起線か。胎土には多量の金雲母を含む。器面は無文で口唇部は隆帯貼付し内外に扇状に出る。胴部には隆起線でS字状文をもつ。口縁部はキャリバー状で胎土には石英を含む。8も口唇部は内外に扇状に伸びる。隆起線で区画し胎土には砂の混入が見られ大木8b式。

口縁部に円形刺突を2列配する9はキャリバー状器形で加曾利EⅢ式。10は大型の口縁部をくの字状に外反させ、口縁部は磨消、胴部はRLの縄文を施文。胎土に少量の雲母を含む。加曾利EⅢ式。

4. 土器片錘（第21・22図）

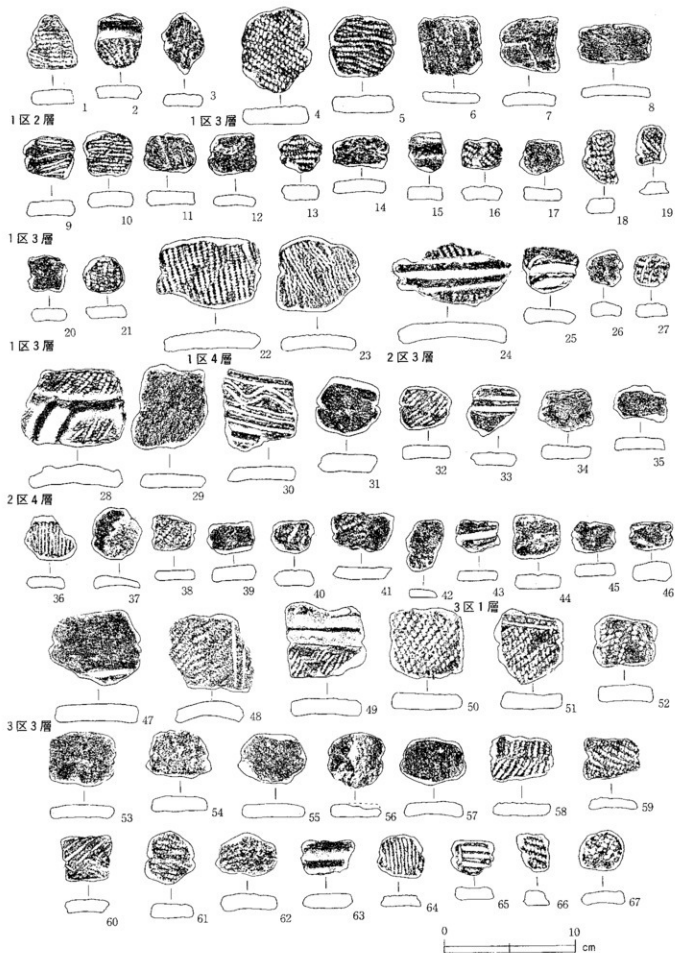
土器の破損部、土器片を利用した土器片錘は130点検出された。一部欠失品もあるが最大で73gから10g前後とかなり幅があるが多数を占めるものは15～25gである。形体的には長方形が大多数を占めた。円形のものも少量認められるが何れも小型で10g前後の重さである。切り目方向を横にした場合大半が本類に該当する。

4面に切り目の入るものは皆無で、円形、方形に属する類は10点前後で1割に満たない。縦長形は13点で4、29、30、42、48、49、50、51、60、61、86、87、88で1割を占める。86～88は阿玉台式の破片を用いている。

方形、長方形を問わずやや重いもの、大型のものは阿玉台式か加曾利EⅠ式前後のものが多い。小型のものは縄文、無文のものが比較的多い。

21は円盤状、81は有孔円盤もしくは瑛状耳飾りの可能性が高い。本貝塚では唯一の製品である。これらの差は当時の自然、生活環境に一因する可能性も窺へよう。

しかし石錘と半比例するのか130点の土器片錘が出土した。これは本時期では比較的軽い錘で「漁業」が営まれていたと推察される。これらの用具で一定の漁獲が得られたと理解すべきと思



第21图 1区2·3·4層 2区3·4層 3区1·3層 出土土器片錘実測·拓影図

われ、石錘の少なさを思考する一因と考える。

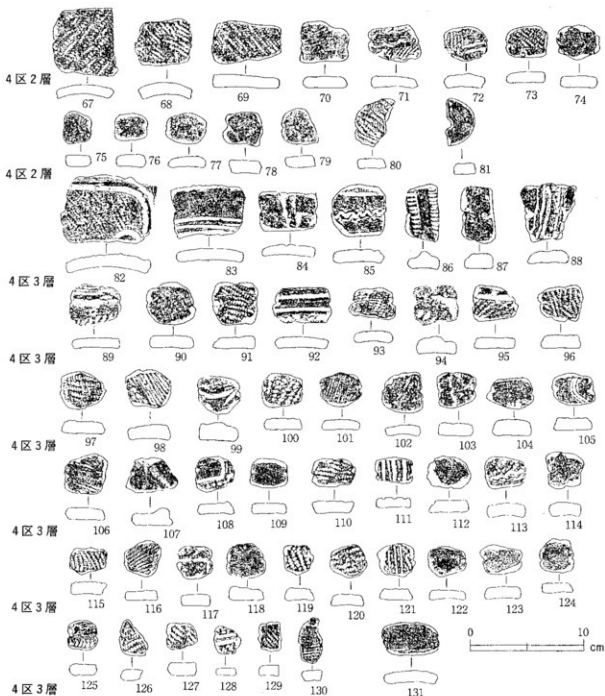
小 結

本地域の貝塚では石材の少なさ、言い換えれば貧弱さは地理的環境が左右すると思つて、単純に地理的条件のみで石器の少なさを理解するには多少の無理があると思う。

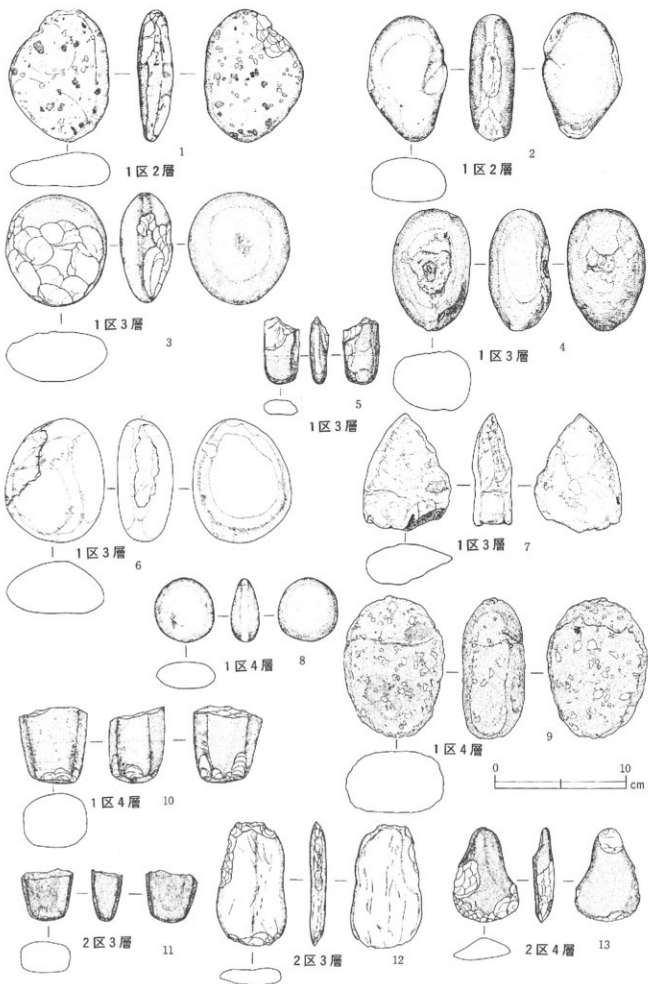
中期後半の加曾利E式期にはそれなりの石器、石錘等がかなり出土しており本貝塚の時期、阿玉台式期における地域差として捉えるべきか。これは同町道城平遺跡の貝塚、道城平西遺跡の貝塚でも同様な結果が見られた。時期的には阿玉台式～加曾利EⅡ式である。

5. 石 器 (第 23・24・25 図)

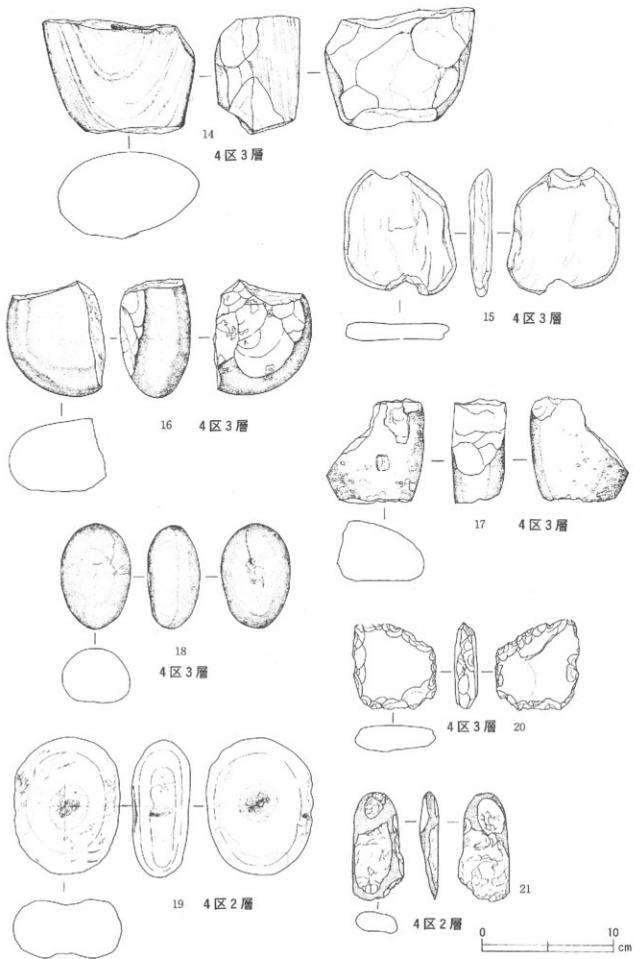
石器は各区から礫器状、川原石状、握錘状、粗製石斧、磨製石斧、凹石と軽石が検出された。



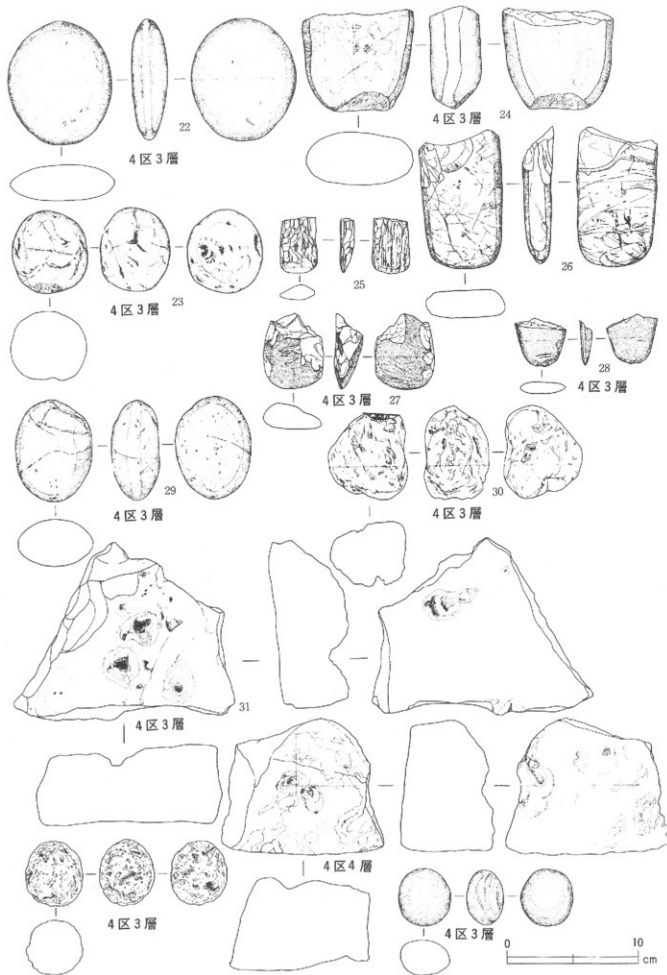
第 22 図 4区2・3・4層 出土土器片錘実測・拓影図



第23图 1区2·3·4層 2区3·4層 出土石器实例图



第24图 4区2·3層 出土石器实测图



第25图 4区3·4層 出土石器实测图

総数は必ずしも多くはない。本地域が石材の供給地から遠隔であることは、近隣の遺跡と比較しても特異な例ではない。

木貝塚で廃棄された石器を検討すれば粗製、粗雑が多数を占める。同時に数量の少なさが石材、原石の確保にかなりの労力を用いたことが想像出来る。貴重品であったと理解される。礫器が大半で川原石の一部を加工、またわ原石のまま利用している。石材は、砂岩、色岩、緑泥片岩、蛇紋岩、安山岩等で第 図5、10、11は磨製石斧で何れも欠失している。礫器が多く川原石の一部にを剥離し、または原石のまま利用したものが多く片側、または両側に敷いた痕跡をもつもので蔽石と識別すべきとも思われる。打製石斧は少なく第 図12のみであった。磨石等は小型で8、23、33、34があり兼用のものは19も見られた。凹石は、粘板岩質の31、32があり石材の確保には困難が伴ったと解される。砂岩の大型の石器は第 図14があるが上下を欠失している。

石錘は1点のみで第 図15であった。軽石は7、30がある。穿孔等は見られないが30は若干丸く加工している。

6. 貝製品 (第26図)

a. 貝 刃

図示したのは2区3層、4層の貝刃である。本層で確認出来たのはハマグリのみであった。貝の腹縁を打欠き刃を付けたもので何れも大型、中型のものをういている。

刃部については腹縁全体に幅の狭く付けるものと腹縁の $\frac{1}{3}$ ほど残して付けるもの、やや幅広く付ける4、7腹縁の中央部のみ付ける2などの3種類の形態がみられる。これらは内側からの押し剥離がおこなわれている。

b. 貝 輪

1区3層からイタボガキ製の貝輪11が完存品で出土している。右殻を用いている。一部未製品の部分も見られるが完成段階に近い製品と理解される。外縁、内縁部分に若干の調整が残されている感じである。12は大型のサルボウの腹縁を磨き内側は切り抜き状で制作途中の破損品と推察される。腹縁の内外共かなり研磨され滑らかになっている。

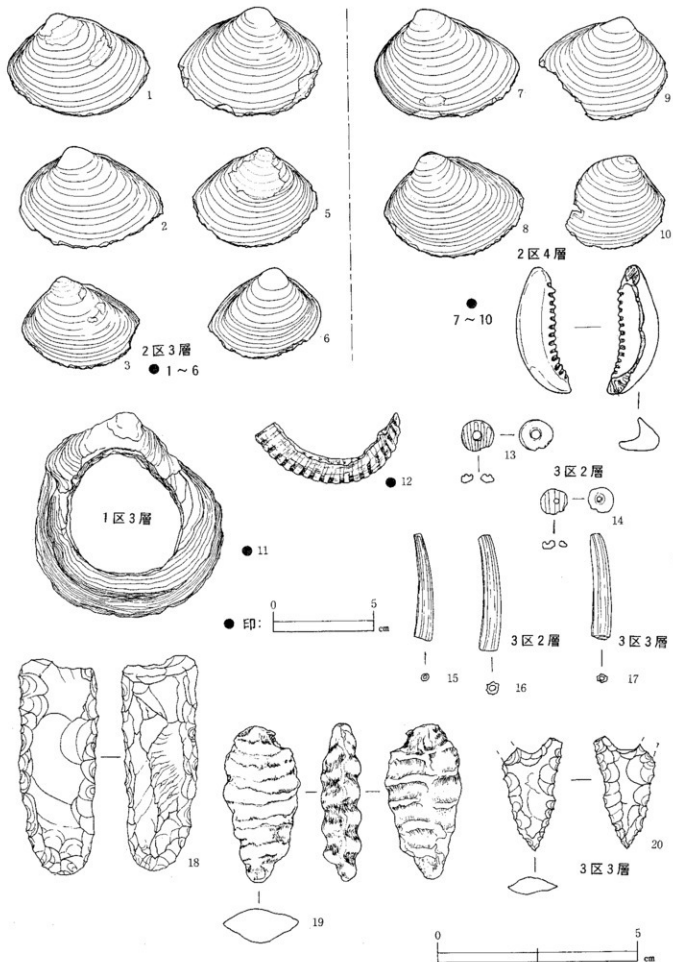
c. その他の貝製品

中央部に円形の穿孔をもつ貝玉(貝製平玉)が出土している。径1.7mm、1.5mmのやや楕円気味で厚さは2~3mmのサルボウ製。15~17はツノガイをカットしたもので使用形態は不明。3点出土している。

d. タカラガイ

タカラガイは『軟体動物門、前鰓亜綱、中腹足目タカラガイ科の総称であり熱帯、亜熱帯の海城を中心に棲息する暖流系の海洋生物である』(注1)

本地域の貝塚では管見のかぎり麻生町麻生の道城平遺跡の貝塚から3個体分、於下貝塚より2点の出土が報告されている。(注2)本貝塚出土のタカラガイは外唇部分の前溝、後溝までの部分で外唇歯は明瞭に残る。背面部は半円状に4ヶ所のカット、加工痕を残す。道城平貝塚の背面とは加工に違いが見られ、半製品の可能性がある。貝種は外唇歯からはホシキヌタガイと推察される。殻長は推定4.5cmを測る。



第26图 1区3層、2区3·4層、3区2·3層 出土貝製品実測图

7. まとめ

本貝塚のC地点のみの調査で結論的な事は言い難いが、検出した遺体を観察した感じを述べてまとめにしたい。貝塚形成の時期は縄文中期中葉の阿玉台式を中心として加曽利E式期前半が土器形式から見た形成期と推察される。

鳥類ではガン、カモ類が中心で比較的簡単に捕獲対象に成り得たと考えられる。その他の鳥類は検出されなかったがカラスを始め多数の鳥類の存在が推察されるが遺体の骨体の関係で消滅の可能性が高い。

シカ、イノシシは、後期の貝塚と比較して全体的に少なく本類の生育環境、逆説的には捕獲対象にさほど力点がおかれなかった。とも思われる。

鳥類、爬虫類においても同様な傾向にあり本貝塚の立置等の特殊性か、时期的な差なのかは更に検討が必要と思考する。

ヒトは、歯骨等から都合3人分のものと思われる。歯骨と下顎骨の一部が出土したが顎骨の欠失状態は普通の状態での死骸ではない。かなり物理的な、たとえば事故などでの死亡が考えられる。

IV 骨角牙製品

1. 骨、角、牙製品

本類は形態で分類し述べる。

シカ角座第28図28は3区3層から出土した角座叉状未製品である。角部分の分岐部を利用し切断、ほぼ整形されているが明確な加工痕はない。鹿角状。23も同様の製品の可能性がある。

24、25、27も切断痕をもち角座叉状半製品と推察され、欠失品の可能性がある。

a. 刺突具

刺突具は第27図5、6、9、16、17、18、22、23が見られる。ヤス状で最大径を基部に置くものが多い。24と第28図21、22はやや胴長で端部を丸く尖るタイプである。11～14はエイ目を利用15、16は牙を利用したものである。

b. 骨針

第27図12、第28図1～6がある。穿孔部をもつ6が唯一の完形品である。他は、断定は出来ない。

c. 釣り針

第27図2、3、第28図9、10は何れも欠損品である。2は大型で糸掛けの刻みをもつ。他は何れも欠失品で不明。3、9、10は、他の製品の可能性が高い。

d. その他

第28図18～20、第27図1、21は21を除き半製品であり意図的に加工したと思考するが不明。

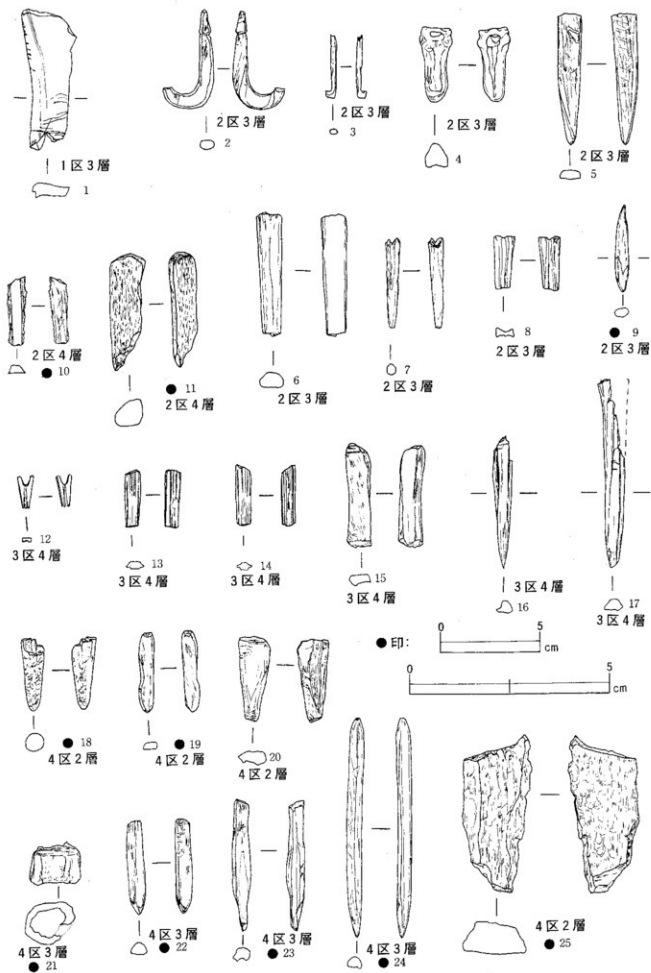
e. 貝製品

本貝塚では貝輪、貝刃、タカラガイ加工品、平玉が出土した。タカラガイは道場平貝塚、於下貝塚等から出土例が見られたが平玉については近隣の貝塚からの報告はない。径2cm、1.5cmの円形状で中央に小穴が開けられている。佐藤一夫氏の研究（主に北海道）では装身具として分類され墳墓等に副葬される例が多い。（北海道における貝製平玉について、佐藤一夫）

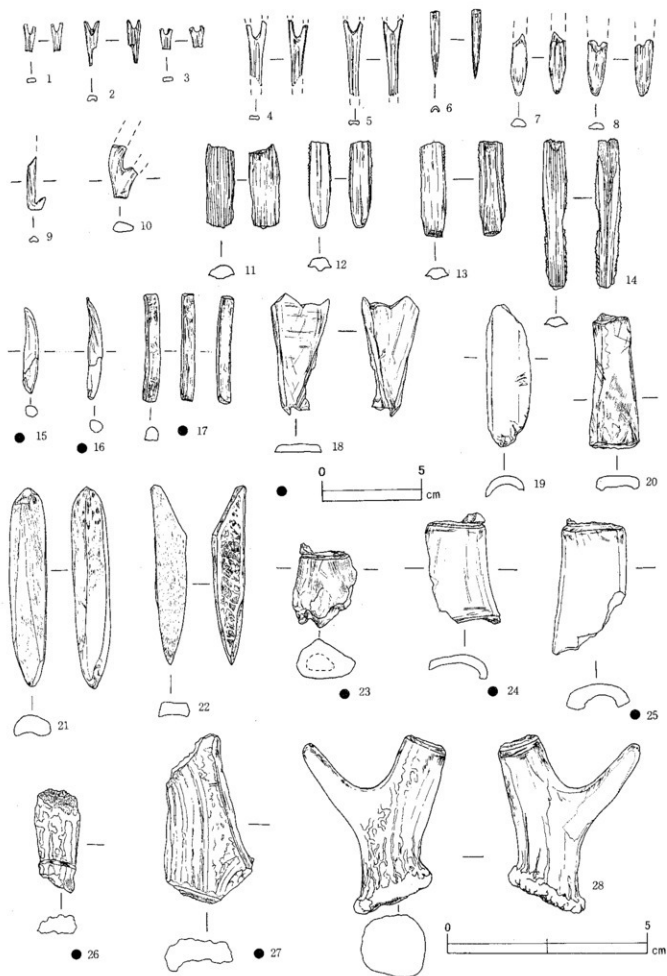
V 脊椎動物遺体

1. 脊椎動物遺体

遺体の多数を占めるものは魚類である。次に鳥類、獣類、両生類が見られた。以下各主要骨格について述べる。細別したのは2区3、4層である。



第27图 1区3層 2区3·4層 3区4層 4区2·3層 出土骨製品、未製品実測図



第28图 3区3層 出土骨製品・未製品実測図

① 魚類

本類は、出土骨体の大半を占める。

a. サメ類

椎骨のみで108個体検出された。総じて少ないか。

b. エイ目

本類は、小型の魚体で椎骨が212点検出されている。歯板52、尾棘11等が検出され数量的にやや卓越し永続的に採取されたと思われる。

c. コチ類

中型の魚体でスズキ、フグに次いで多い。数量的にも前者と遜色の無い出土量を示し重要な魚であった。

d. スズキ

内湾性の重要な魚種で本貝塚でも卓越する出土量をもつ。前上顎骨、歯骨、角骨等が見られ成長過程で環境が合わない事も考えられる。

e. コショウダイ

本種も同定されるものは無かったが同定ミスの可能性もあり存在すると思われる。

f. ヘダイ

本種もタイ類の中に含まれる可能性があり同定ミスの可能性あり。

g. クロダイ

個体数では多い部類に入る中型魚で背鰭棘223点は生活の上で重要地位を占めていた事が窺われる。本貝塚に限らず周辺貝塚でもその地位は不変に近い。

h. マダイ

方骨が3点検出されている。主体的な魚ではない事が窺われる。

i. ボラ

主鰓蓋骨が2点同定されている。季節的な魚でさほどの数量は多くない。

j. カレイ科

イシカレイの第一血管棘が少量同定された。やや大型のものであった。本貝塚の特徴ではない。

k. フグ

歯板、前上顎骨、方骨等が検出されている。数量的にはクロダイ、スズキに次いで個体の数が多い。

l. サバ科

尾椎体のみで他は細分出来なかった。相当数のものがあつたと思われる。

m. マイワシ

腹椎体、椎骨が検出された。

n. ウナギ

本層では椎骨が8点と少ない。両側の同層でも椎骨13点と同様な検出状態である。

小 結

上記以外のものにマグロの尾椎体7、コノシロ、ニゴイ、マハゼ、サヨリ属、ボラ科、ニシン科、フナ等が検出されている。量的にはスズキ、クロダイ、フグが卓越している。骨が検出されている。ウナギ、フナ等の数量の少なさはサンプリングエラーのみでは無く本地域、言い換えれば現在の夜越川水系では生育には適していなかった可能性も推察される。コチの出土量がやや多

く内湾砂泥質の海底の存在が推察され、それは貝類からも窺える。ニシン科の出土が見られたがサケの検出は出来なかった。

貝塚からは、これらを捕獲する釣り針、刺突具は少量認められ特に土器片鏟は20グラム前後のが多量に出土している。石鏟は1点のみで道城平遺跡の貝塚と同様な傾向が認められる。(注1)その他に網等の捕獲用具の存在が推察されるが遺物としては確認出来なかった。

② 鳥類

本類は、ガン、カモとキジ科が認められ一部同定出来ない骨もあった。尺骨、中手骨、脛骨が検出されているが数量は少ない。本来の捕獲数が少なかったのか、捕獲対象にしなかったのかは不明であるが西浦東岸域の貝塚では不変的特徴の可能性がうかがえる。於下貝塚では報告例の記載がない。言い換えれば検出されなかった。

③ 哺乳類

本類は、イノシシ、シカ、タヌキ、テン、アカネズミ、リス科等が検出されたが、その数量は少なく1頭分ないし2頭分がやっつて主体的な生活の糧とは計りかねる。

出土量の割りには小型動物の下顎骨等が見られた。2区3層、3区3層でもさほどの変化は見られず本貝塚を残した縄文人の主たる捕獲対象にはならなかった。と理解したい。貝塚の地形的な位置も影響していると推察するが、これら諸動物の生育環境が悪いのかは不明である。

④ 人

2区3層で歯が3本、3区3層から下顎骨、右下中切歯と胸椎の一部が検出された。左下顎骨は第二大臼歯が残っていた。咬合面は平滑で咬耗度は強い。顎骨は中央部で欠失し、また頬部で欠失している。

単独で出土した下顎右中切歯は、咬合面の歯冠が平滑に咬耗し2区3層出土の左大一小臼歯と大三大臼歯は歯根は欠失しエナメル質が磨耗している。出土した歯から見れば2人分と推察出来る。年齢的には歯の咬耗度からは壮年期前後と熟年期前半が推定される。

⑤ 両生類、爬虫類

本類は、アカカエルが2区3層から脛骨が1点出土している。数量的には少ない。ヘビは椎骨のみで個体数は不明。これらは食用に供されたものと推察されるが量的には少ない。

VI 貝類

本貝塚の主体を占めた貝は、アサリ、オオノガイ、ハマグリ、シオフキの二枚貝とウミニナ科、ウミニナ、アラムシロであった。また淡水産のカワニナとヤマトシジミがかなりの量を占め本貝塚周辺の自然環境を彷彿させる。細別は分類表参考にされた。

これらの貝種から推定される当時の環境は海水、海岸線がほぼ貝塚近辺近くに位置し、気水性に近い海水が想定される。二枚貝の占める割合は砂泥質の海底が考えられ、きれいな砂浜はやや

離れた地域に存在していたと推察される。カキ等岩礁地域を好む種類も見られたが割合は少なく、また生育環境もあまり良好ではないことが窺える。

ツメタガイ、スガイ、ダンベイキサゴ、ヒロクチカノコガイ等の腹足綱が多く特にダンベイキサゴは他の遺跡に比べやや多い。

腹足綱16種、掘足綱2種、斧足類16種が確認された。その他別項に上げたタカラガイ加工品が出土している。

小 結

これら貝類から、また出土量から本貝塚周辺の海底は砂泥質のが推察される。基本と成るハマグリ、アカニシの少なさは本貝塚の特徴である。これは縄文中期中葉の時的な差か海底及び自然環境の差異によるものか、今後の研究を待たなければならないが筆者の調査した玉造町井上貝塚は後期掘ノ内式～安行式の時期を中心とした貝塚でハマグリ、サルボウを多量に出土している。また同町若海貝塚は中期後半加曽利E式を中心とした貝塚でも同様な結果を見た。於下貝塚は後期主体の貝塚でハマグリ、サルボウが主体を占めている。何れも西浦東岸域の貝塚である。(注1)

麻生町道城平遺跡の貝塚は中期中葉の時期であるがハマグリ、サルボウ主体であったが二次調査で確認された貝塚ではヒメシラトリガイが多いようであった。(注2)

注1 時代により海面の低下が考えられ淡水域の増加により海岸線、素浜の海浜の発生、発達によりハマグリ等の二枚貝の増加が推察される。

注2 現在整理中であり仔細は無理であるが調査所見ではかなりの割合を示す。

VII 総括

本貝塚は、牛堀地区の清水、麻生町富田、粗毛地内付近に源を發し上戸地内より常陸前川に注ぐ夜越川に解折された樹枝状支谷に面する西岸の面積60m程の台地周辺に占地している。大門貝塚と呼称される貝塚は2図に示すようにA、B、C、Dの4カ所の地点からなる。いずれの地点も斜面部に占地しているがA地点のみ、一部平坦部にも占地していたが大部分陸田化され壊滅的被害を受けた。傾斜部の農道部分からは潮来牛堀地区に位置し、農道部分を除き土取りのため壊滅した。

C地点は、前述の通り西側の斜面部に位置する。確認範囲、面積はおよそ25m×7m前後の範囲がボーリングで確認されるが中心部は幅10m、長さ5m程の長細い凹部に投げ込まれたと推察される。現状は荒地化した。以前は畑地として耕作された為、かなり貝殻は広い範囲に確認された。これらはいずれもボーリング探査では貝層は確認できず耕作時の散乱、散布によるものと推察された。

貝層は4層を認めた。上部は耕作土、混貝層、純貝層、混貝層、混土貝層、混土層でかなりの角度で落ち込む。ガケ部分から投げ込まれた感じの堆積を示した。1、2層では土器は比較的少なく混貝層、混土層にやや多く包含していた。

貝種は、腹足類20数種、網罟類では2種、斧足類約20種が確認されているが現在整理中であり、本報告書では貝製品のみを報告した。整理済み次第報告したい。貝製品ではハマグリを利用した貝刃が相当数検出されている。貝の左右は顕著な差は把握できなかった。その他、タカラガイの出土が認められた。

魚類は、周辺の貝塚で確認される魚骨が認められ特別な変化は認められなかった。顎骨からはタイ類、フグなどが卓越し所謂海水産のものが多数を占めた。淡水域、汽水域の魚骨は皆無に近い。

シカ、イノシシに代表される獣骨類では個体数が少なく僅かにシカ1頭分が顎骨、肩甲骨から推定される。イノシシは骨片のみで頭数確認は不可能であった。

鳥類も同様でガン、カモ類、キジ等が認められた。爬虫類ではヘビの椎骨が認められているが種は特定できなかった。リス等の小動物も認められたが数量的には極めて少ない。

骨類を使ったヤス状刺突具、釣針、鹿の角座を利用した未製品が認められた。鹿角座は道場平ら遺跡出土の角座と類似し同様な製品の可能性が高い。

貝製品の中に平玉が存在した。古くから存在は知られているものであるが近隣の貝塚の出上例は管見に無いので一応特筆すべきと思う。そして大半の例は北海道の遺跡であることである。

土器については邦文でふれたとうり阿玉台式1b式前後が貝塚の形成期になり加曾利E1式期前後で本貝塚は収束する。主体的には1b～2式前後が貝塚形成の主体的な時期と推察される。最後に貝類についての報告が本書に掲載出来なかったことをお詫びしたい。

[少々時間を頂き、まとめて報告したい。]

各区出土、同定付表 3区3層 出土魚類

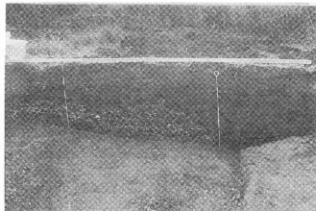
遺跡名	採取層位	種 類	頭骨 skull		内 臓 骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩 胛 骨 shoulder girdle			そ の 他			
			吻骨 vo	上顎頭骨 supro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	上鰓蓋骨 ope	鰓下蓋骨 sub	鰓骨 imop	腹椎骨 abd	尾椎骨 cau	後側頭骨 p. tem	上鰓頭骨 s. cl		肩鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
大 門	3区3層	ク イ	r													椎骨 11					背棘骨76 第1血管棘19 歯 49 鱗片 42		
		ク ロ ダ イ	r		6			1														関節骨R2 (L)1	
		エ イ 目	r													椎骨 332	尾棘 16					鱗板 1 歯板 16	
		サ メ 類	r													椎骨 239							
		ス ズ キ 属	r	1	18		16		7							椎骨						関節骨L4 R7	
		コ チ	r		36			1				4											歯根R9 (L)6 右関節骨 1
		フ グ	r										6										歯根R22 鱗片 6 (L)30
		サ ヨ リ 属	r													椎骨 227							
		ウ ナ ギ	r													椎骨 13							
		マ イ ワ シ	r													椎骨 194							
		ニ シ ン 科	r													椎骨 756							
		マ ダ イ	r								6												
イ シ カ レ イ	r								5												第1血管棘 4		
大 門	3区3層	カ レ イ	r											8									
		マ ハ ゼ	r		1																		
		サ ッ バ	r																			第1脊椎骨 12	
		マ イ ワ シ	r																			第1脊椎骨 7	
		コ ノ シ ロ	r																			第1脊椎骨 18	
		ボ ラ 科	r												1								
	サ バ 科	r												2			尾椎 12						
その他	魚 骨	r																			魚骨 13220 椎骨 1760 ウロコ 24		

各区出土、同定付表 2区3層、3区3層・4層出土 哺乳類、鳥類、爬虫類

遺跡名	採取層位		r	頭	下	脊	肩	上	腕	尺	中	寛	大	脛	腓	距	骨	中	指	その他			
			/	骨	顎	椎	胛	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨		骨	骨	
			1	cra	md	vert	scap	hmn	rad	ul	mc	cax	fe	tib	fib	ta	ca	mt	dig				
大 門	3区3層	ガンカモ	r								1	4											
		キジ科	r												6								
		その他不明鳥類	r																			146	
		アカガエル	r												1								
		へび	r																			椎骨 29	
		アカネズミ	r		1			1					2		1	1							
		チン	r		1																		
		リス科	r						1														
		シカ	r																				体骨 86
		不明獣骨	r																				体骨 162 歯 10 歯 7
		イノシシ	r																				歯 1 乳歯 1
		タスキ犬?	r																				歯 1 乳歯 1
		人間	r																				
		3区3層	3区3層	ガンカモ	r				1														石鳥口骨 1
キジ	r																					1 1	
トリ類	r																						細片 92
へび	r																						椎骨 16
ネズミ	r												1	1	1								歯 6
歯目(おそろく)リス科	r								4														
不明小動物	r																						62
イノシシ	r																						歯 6
ウサギ?	r																						歯 3
タスキ?	r																						歯 1
鹿	r																						骨細片 19 角 2
イノシシ	r				1			1															
獣骨	r																						細片 137
人間	r																						歯 1
3区4層	3区4層	人間	r																				



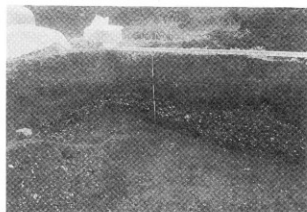
左調査



貝塚と畑の埋積土



グリットによる調査



貝塚と畑の埋積土



確認トレンチと水田



各グリットと貝層



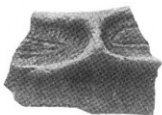
南5区遺物出土状態



鹿角産出土状態



41



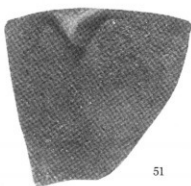
42



47



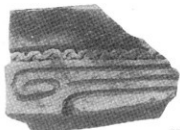
49



51



52



56



58



60



64



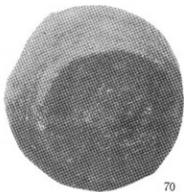
65



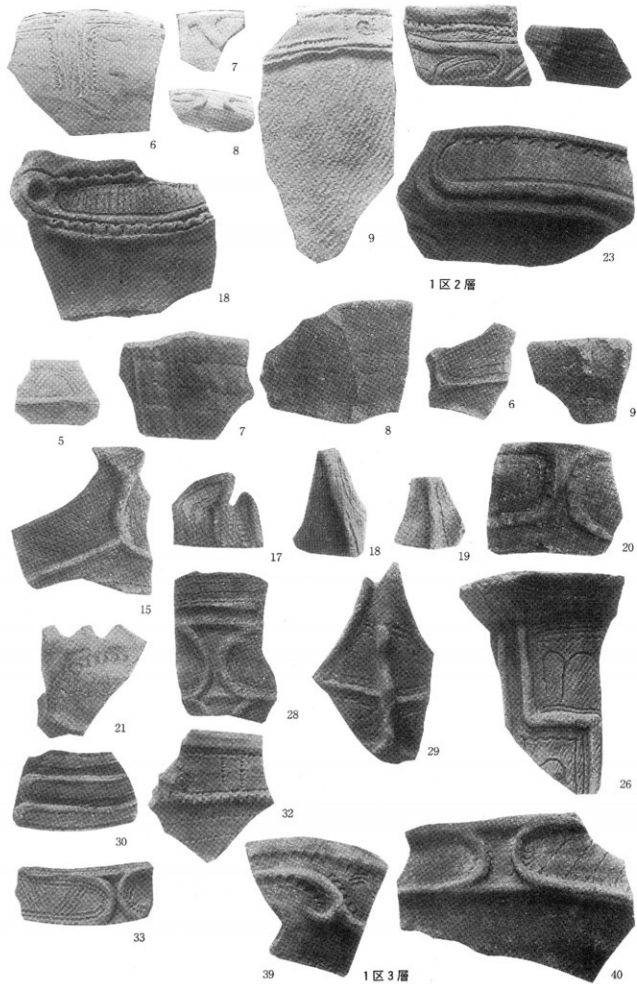
66

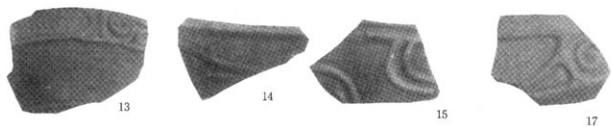
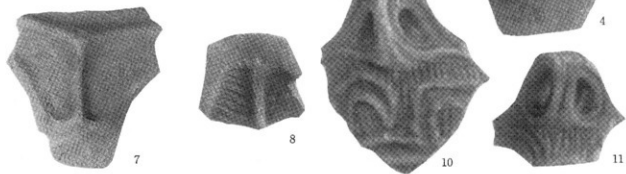
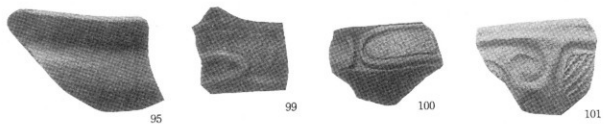
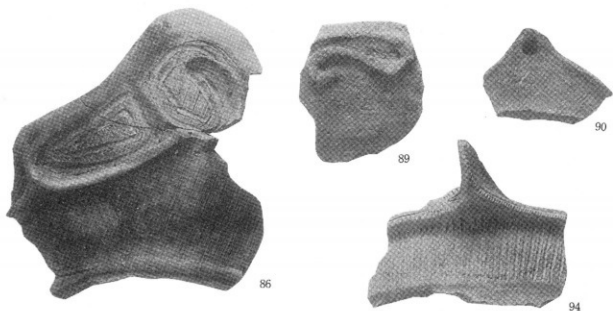


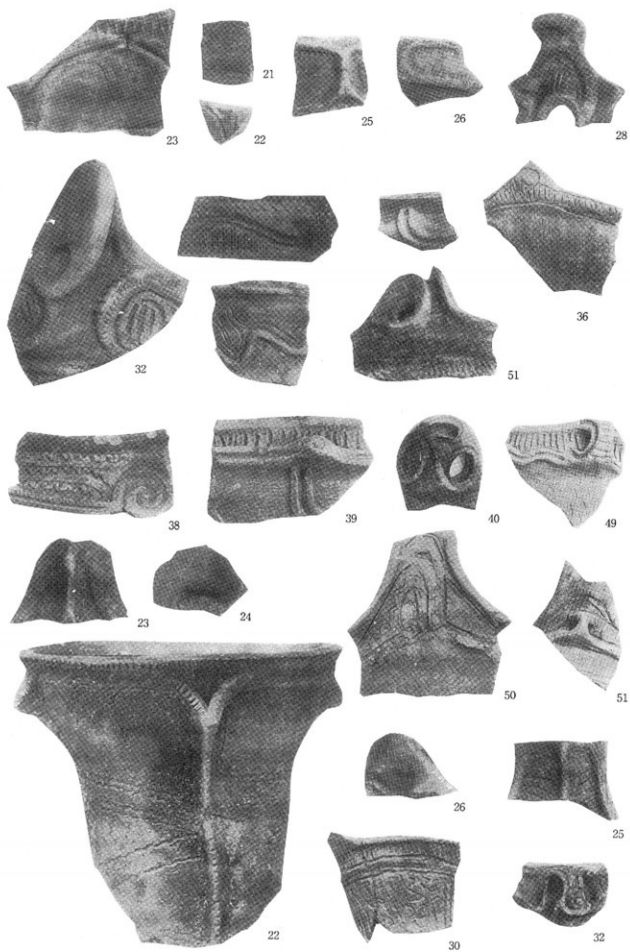
67



70

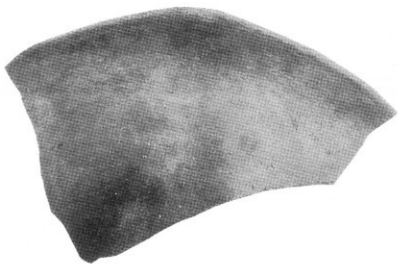








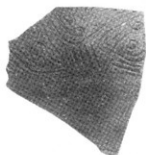
34



35



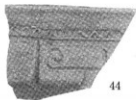
42



40



43



44



3



4



5



6



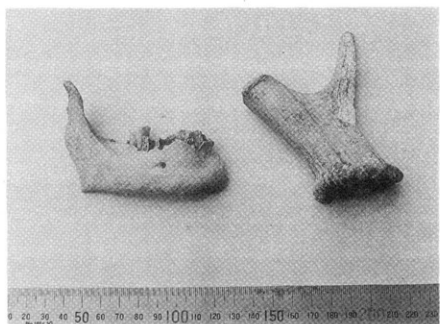
8



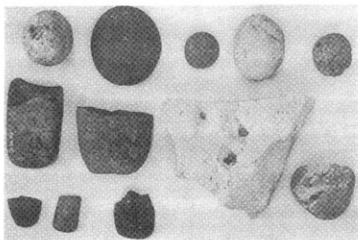
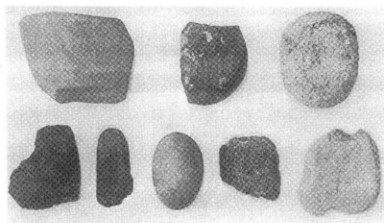
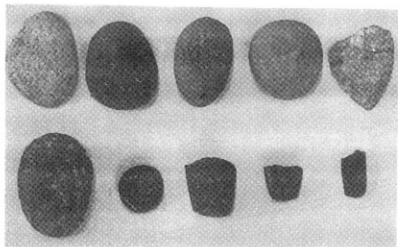
13



17



PL-7 出土人骨、鹿角、貝輪等



抄 録

フリガナ	ダイモンカイズカCチテンハックツチョウサホウコクシヨ							
書名	大門貝塚C地点発掘調査報告書							
発行者名	麻生町教育委員会・大門貝塚C地点発掘調査会							
所在地	〒311-3892 茨城県行方郡麻生町麻生1561-9							
編集者名	汀 安 衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所在地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718-3							
発行年月日	西暦 2002年 6月 30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大門貝塚 C地点遺跡	アソウマチ 麻生町 オオアサホボケ 大字粗毛	08421	026	35° 58' 35"	140° 30' 48"	1994.10.08 1994.10.25	35㎡	土砂採取に 伴う調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大門貝塚 C地点遺跡	貝塚	縄文時代中期	住居跡	縄文土器 貝・鹿角				

大 門 貝 塚
C地点発掘調査報告書

2002年 6 月

編集 鹿行文化研究所
汀 安 衛
鹿嶋市青塚690

発行 大門貝塚C地点発掘調査会
麻生町教育委員会
麻生町麻生1591-9

印刷 久保田印刷
麻生町四鹿963-20